

Thinking about
the ancient ruins
in Numazu

静岡大学
公開講座
ブックレット6

沼津の古代遺跡を 考える

滝沢 誠+篠原和大+菊池吉修

静岡大学生涯学習教育研究センター(編)

沼津の古代遺跡を考える

静岡大学生涯学習教育研究センター（編）

第1回 古墳出現期の沼津

はじめに／辻畑古墳の調査／辻畑古墳の年代／神明塚古墳の調査／神明塚古墳の性格／古墳出現期の沼津／おわりに

滝沢 誠

3

第2回 農耕文化形成期の沼津

はじめに／沼津の原始文化と農耕文化の形成／農耕文化への胎動／沼津の水稲耕作文化の形成／開発と地域社会の進展／広域的な交流の開始と古墳の出現／まとめ

篠原 和大

23

第3回 古墳時代後期の東駿河の様相

埋葬施設からみる特徴

はじめに／前期～中期の古墳と後期の古墳／埋葬施設から見た東駿河の特長／海を越えて／まとめ／おわりに

菊池 吉修

43

本書は、静岡大学生涯学習教育研究センターの主催により、以下の要領により行われた公開講座「沼津の古代遺跡を考える」の講演録である。

- ・日時：（第1回）2010年9月4日（土）、（第2回）9月11日（土）、（第3回）9月18日（土）
14:00～16:00
- ・会場：沼津市民文化センター

古墳出現期の沼津

滝沢 誠

はじめに

沼津市東熊堂の辻畑古墳は、近年行われた本格的な発掘調査の結果、古墳出現期にさかのぼる最古段階の前方後方墳である可能性が高くなりました。ここでは、辻畑古墳の調査成果を中心に、古墳出現期の沼津について考えていきたいと思います。

さて、辻畑古墳の調査成果は、静岡県東部における古墳の出現について、従来の理解を大きく塗り替えるたいへん重要なものです。とはいえ、それだけで古墳出現期の沼津が語れるわけではありません。じつは、この十年以内の間に、沼津市内では今回のテーマに関する重要な調査成果がもう一つありました。それは、沼津市松長にある市の指定史跡、神明塚古墳に関する調査成果です。この神明塚古墳も、あ

らたな発掘調査の結果、古墳時代前期にさかのぼるとも古い時期の前方後円墳であることが明らかとなったのです。

古墳時代は、およそ三世紀の中頃から六世紀の終わり頃にかけてつづいた時代で、平面形が鍵穴形をした前方後円墳と呼ばれる特徴的な古墳が日本列島の各地に築かれました。その最大級のもの、現在の奈良県や大阪府に集中的に分布していることから、そうした現象の背後にヤマト王権の成立を認め、それを中心としたひろい政治的まとまりが日本列島に初めて出来上がった時代であると考えられています。

一般に古墳時代は、前期、中期、後期の三時期に区分されています。これまで静岡県東部では古墳時代前期後半にさかのぼる古墳は知られていましたが、今回調査が行われた辻畑古墳、そして神明塚古墳は、それらよりもさらに古

くさかのぼる時期の古墳であると考えられます。とくに辻畑古墳は、東日本全体の中でも最古段階に位置づけられる、数少ない前方後方墳であると思われます。これらの調査成果は、この地域のみならず東日本における古墳の出現を理解していく上でもきわめて重要な資料を提供するものなのです。

以下、辻畑古墳と神明塚古墳の調査成果を順次紹介しながら、それらの年代や性格を検討し、最後に古墳出現期における沼津の歴史的評価について考えていきたいと思えます。

1 辻畑古墳の調査

†古墳の位置

図1は、静岡県東部の沼津市から富士市にかけて確認されている大型古墳の分布を示したものです。この図は、三百年以上にわたってつづく古墳時代の間に築かれた前方後円墳や前方後方墳さらには大型の円墳を示したもので、それらのすべてが同時期に築かれたということではありません。むしろ、それらは年代を異にして築かれていることから、それぞれの時期に築かれた各地域における有

力者の墓であると考えられます（滝沢二〇〇五）。

その点をふまえた上で、この図に示した大型古墳の分布を大きくとらえると、現在の沼津市内に分布するグループと、富士市内に分布するグループに分けることができます。さらに細かくみると、砂丘上に分布する古墳を別のグループとしてとらえることも可能ですが、ここではひとまず、かつて愛鷹山の南側にひろがっていた浮島沼の両側に大型古墳のまわりがあることを確認しておきたいと思えます。

いうまでもなく、ここで取り上げる辻畑古墳は、いま述べたグループのうち、沼津市側のグループに属しています。現在の場所としては、JR沼津駅から北方に約2kmの地点



図1 沼津周辺における大型古墳の分布（★は辻畑古墳）

で、国道1号線のすぐ北側に位置しています。また、地形的にみると、愛鷹山から南に延びる尾根の末端に立地しています。

今回の発掘調査が行われる以前、この古墳の上には「高尾山穂見神社」が鎮座していました。つまり、結果的には辻畑古墳の後方部にあたる部分が社殿をいたたく高まりとして利用されていたわけです。この高まりについては、以前から古墳の可能性が指摘されていましたが、それを裏付ける明確な証拠はありませんでした。そうした中で、この部分を通して国道1号線につながる大きな道路の建設が進められることとなり、二〇〇五年度と二〇〇七年度には、神社の移転工事などにもなる部分的な発掘調査が沼津市教育委員会によって行われました。その結果、この高まりは前方後方墳の後方部であることが確認され、二〇〇八年度から二〇〇九年度にかけて、本格的な発掘調査が行われることになったのです。

†墳丘の形態と規模

図2は、発掘調査によって明らかとなった辻畑古墳の測量図です。図の上側（北側）が後方部、下側が前方部で、左側（西側）は現在も使われている道路によって一部が破

壊されています。図に示されているように、調査の結果この墳丘の周囲には墳丘の形に沿うように幅七〜九メートルの周溝がめぐっていることが判明しました。そして、この周溝の内側を基点に計測すると、墳丘の長さは約六〇メートルになります。

じつは、調査が行われる以前、辻畑古墳の前方部は完全に削り取られており、社殿が載っていた後方部も周囲が削り取られて本来の形をとどめていませんでした。ですから、古墳であるか否かの見分けも難しかったのですが、今回の発掘調査でこの周溝が確認されたことにより、前方後方墳であることが確かめられたわけです。

周溝の内部からは多量の土器が出土しました。それらの土器の出土状況や接合状況については、現在整理中のため

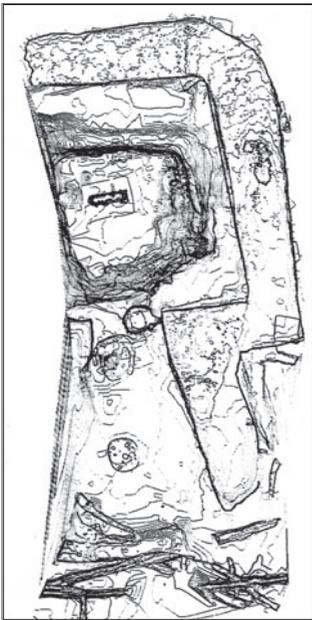


図2 辻畑古墳（現地説明会資料より）

詳しいことはまだわかりません。ただ、今回のように多量の土器が出土しますと、それらがすべて古墳にともなうものなのかどうかという疑いが生じてきます。つまり、それらは古墳築造以前に存在した集落で使われていた土器が混入したものでないか、という見方が出てくるわけです。しかし、辻畑古墳が立地する尾根の先端部は非常に幅が狭く、その部分に大規模な集落の存在を想定することはできませんし、実際の発掘でも周溝から出土した土器の年代に相当する集落の跡は確認されていません。また、周溝から出土した土器は、完全に近い形に復元できそうなものも多く、破片の割れ口も総じてシャープな状態を保っています。これらの事実から、周溝内出土の土器は、平安時代に属する一部の土器を除いて、基本的に辻畑古墳にかかわる祭祀に使用されたものであろうと考えられます。

↑墳頂部の土器

後方部の墳頂部では、もともとあった社殿を解体し、その基礎を抜き取って表面を清掃した段階で、中心部の二ヶ所に土器のまとまりが確認されました。これは後になってわかったことですが、これらの土器は埋葬施設に納められた木棺のほぼ真上にあたる位置に置かれたもので、それぞ

れが一個体をなす壺形の土器でした。しかも、副葬品の配置から想定される被葬者の頭側と足側にそれぞれ一個体ずつ、意識的に土器を配置したものとみられます。埋葬時の儀礼に使われたとみられる土器が、本来の配置をほぼ保った状態で検出されることはきわめて稀で、その点で大変貴重な資料と言えるものです。

この二つの壺のうち、頭側に置かれていたのは大廓式の大壺です。大廓式土器は、沼津市の大廓遺跡で出土した土器をもとに設定された駿河東部地域の土器様式で、古墳時代前期前半を中心に使われていた土器です。その中には特徴的な大型の壺が知られており、今回出土した土器はその下半部しか残っていませんでしたが、まさにその大型壺とみて差し支えないものです。

一方、足側に置かれていたのは、いわゆる二重口縁壺です。口の部分が段をなしているのが特徴的な土器で、古墳時代前期には古墳での祭祀によく用いられた土器です。今回出土したものは頸の部分が直立するタイプのもので、近畿地方を中心に発達していく一群の系譜を引くものとみられますが、段の部分が二段になっているものは他に例がなく、その点をどのように理解するのかは今後の課題と言えるでしょう。

これらの壺とは別に、後方部の墳頂部では、東海西部系の加飾壺、いわゆるパレススタイル壺の破片が出土しています。その破片は、発掘前の清掃段階でも採集されていますが、いまのところその個体数を把握することはできません。ただ、ここで注目すべきは、墳墓祭祀の中でもっとも重要な位置を占める埋葬儀礼に際して、在地の土器のほかに、それぞれ系譜を異にする外来の土器が用いられていたとみられる点です。こうした事実は、この古墳に葬られた人物が在地の集団に基盤をもつばかりではなく、より西方の有力地域との間に強い結びつきをもっていたことを示しています。

† 埋葬施設と副葬品

先ほど述べた二つの土器の下からは、墳丘の主軸にほぼ直交するかたちで東西方向の埋葬施設一基が検出されました。そこでは、墓壙と呼ばれる長方形の大きな穴を設け、その中心部分に木棺を納めている状況が判明しました。木棺は長い年月の間に腐ってしまい、すでに失われていましたが、木棺を据え付けた痕跡から、その大きさは長さ五・一メートル、幅一・二メートルと推定することができます。また、木棺を納めるための墓壙は、墳丘を造った後に墳頂部

から掘り込んだものではなく、墳丘を造る過程で墳頂部を凹ませた、いわゆる構築墓壙であるとみられています。

埋葬施設内からは、副葬品として、銅鏡一、勾玉一、鉄槍二、鉄鏃一束、鉈一が出土しました。その詳しい出土状況をみていきますと、まず木棺西側の北辺で、身が長い鉄槍と鉄鏃の束が出土しました。これらの鉄槍と鉄鏃は、いずれも鋒を西側に向けていました。また、鉄槍の長柄とみられる痕跡が、木棺の北辺に沿って東側に延びていく状況も確認されました。木棺の中央部からは、勾玉一点が出土しました。それより東側の北辺からは、銅鏡一面が割れた状態で出土し、さらに東側の木棺北辺寄りでも、身が短い鉄槍と鉈が出土しました。

こうした副葬品が出土した一方で、被葬者の遺体にかかわる痕跡は一切確認されませんでした。長い年月の間に、骨にいたるまで完全に腐ってしまったようです。ただ、これまでの調査事例から、銅鏡は被葬者の頭や胸付近に副葬されたものが多く、また、木棺の幅は被葬者の頭がひろいという傾向が指摘されています。これらの点から判断すると、この被葬者は、頭を東側に向けて伸展葬で埋葬されていたとみることができます。さきほど、墳頂部から出土した土器に関連して、頭側、足側という表現を用いましたが、

それはこうした判断をふまえてのことなのです。

このほか棺内では、被葬者の頭から胸付近とみられる場所を中心に、明瞭な朱の広がりが確認されました。科学的な分析を行わなければ確かなことは言えませんが、おそらく水銀朱であろうと思われます。遺体の埋葬に際して朱を散布したものとみられますが、このような風習は、古墳時代前期を中心にひろく認められるものです。

2 辻畑古墳の年代

土器の編年的位置

辻畑古墳の調査成果においてとくに注目されるのは、その築造年代がきわめて古く遡るのではないかとみられる点です。もちろん、たんに古いということが重要なではありません。それほど古い時期の古墳が当地域に築かれたことの意味が重要なのですが、そうした意味を探っていく前提として、この古墳の年代についての認識を深めておく必要があります。

そこで、辻畑古墳の年代を知る手がかりとしてまず問題になるのは、周溝内や墳頂部から出土した土器の編年的位置づけです。多量に出土した土器は現在整理中であり、詳

しい内容はまだわかりませんが、後方部東側の周溝内から出土した一点の高坏（図3の下）はきわめて重要な資料と言えるものです。

この高坏は、坏部

の下側が屈曲する有稜高坏と呼ばれるものです。じつは、古墳時代前期の半ば過ぎまで、沼津を含む東日本諸地域の土器は、東海西部（伊勢湾沿岸地域）の土器の強い影響下にあります。つまり、東海西部の土器の形態や製作技法を採用するかたちで在地の土器生産が行われるわけですが、そこには東海西部から持ち込まれたとみられる搬入品もわずかながら存在しています。そして、今回出土した問題の高坏は、使われている粘土や全体のつくりから判断して、東海西部からの搬入品と考えられるものなのです。

東海西部には、こうした土器がつけられていた頃の代表的な遺跡として愛知県の廻間遺跡があり、同遺跡の出土土器を中心として、いわゆる廻間編年が組み立てられています（愛知県埋蔵文化財センター一九九〇）。その編年を念

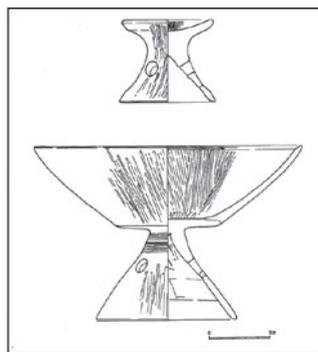


図3 辻畑古墳出土の土器（現地説明会資料より）

頭におきながら今回出土した高坏をみた場合、口唇部に明瞭な面をもつ坏部はやや浅い形態をとるものの、内湾気味の脚部は上部に数条の沈線文様をとまなうという特徴を指摘することができます。これは、廻間Ⅱ式の前半から中頃までの特徴とみることができそうです。

ところで、奈良県の箸墓古墳は、墳丘長約二八〇メートルを測る前方後円墳で、巨大な前方後円墳としてはもっとも古く遡るものとみられます。その年代は、奈良盆地における土器編年の布留Ⅰ式に位置づけられており、それは東海西部の土器編年における廻間Ⅱ式の終わりから廻間Ⅲ式の初め頃に併行するものと考えられています。つまり、いまかりにこの高坏が辻畑古墳の築造年代を示しているとした場合、その年代は箸墓古墳よりも古く遡ることになるのです。これは、古墳の出現を理解する上で見過ごしがたい問題です。

ここで注意しなければならないのは、辻畑古墳の周溝内から出土した土器にはやや年代の幅があるとみられることです。現在整理中の土器の中には、廻間Ⅲ式に併行する時期の土器も多く含まれているようです。そうなると、どの時期の土器が古墳の築造年代を示しているのか、より慎重な判断が求められます。さきほど述べたように、周溝内か

ら出土した多量の土器は基本的に古墳にとまなうものとみられますが、それらの中には、埋葬以前の祭祀に用いられたものや、埋葬終了後の追加的な祭祀に用いられたものが含まれている可能性を考えてみなければなりません。

†副葬品の特徴

辻畑古墳から出土した副葬品のうち、銅鏡と鉄鏃については、その特徴からおよその編年の位置を探ることができます。

銅鏡は、木棺内から割れた状態で出土しました。今回検出された埋葬施設には、いっさい盗掘の痕跡はありませんでしたので、これは盗掘の影響によるものとは考えられません。となると、木棺の腐朽にともなうて自然の力で割れた可能性も考えられるわけですが、どうもこの鏡はもともと割れた状態で副葬されていたようです。やや離れた位置から出土した小さな破片もありますが、それらを集めてみても完全な鏡の形に復元することはできず、かなり足りな部分認められるのです。

じつは、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけて、鏡を意図的に割って副葬したり、割られた鏡の破片を副葬したりする風習が特徴的に認められます。前者は「破

「破鏡」、後者は「破鏡」と呼ばれるものです。そのうち、今回出土した鏡を破砕鏡とみてよいならば、それはいま述べたような年代的傾向を指し示すものと考えられます。

鏡の背面には文様が鑄出されています。その特徴から、この鏡は六つの乳の間に獣像などを配した、六像式の「上方作系浮彫式獣帯鏡」とみることができます。この形式の鏡は、二世紀代の中国で製作されたものとする意見（岡村一九九三）があり、東日本では、長野県の弘法山古墳や中山三六号墳、千葉県の高部三二号墳といった出現期古墳での出土例が認められます。その点を重視すれば、鏡の形式自体もきわめて古い年代を示すものと言えるでしょう。

約三〇点が出土した鉄鍔は、特殊なつくりの一点を除くと、柳葉式と腸袂三角形形式に大別することができます。そのうち柳葉式の鉄鍔は、両側面がS字状カーブをなす典型的な形態で、鍔身部と莖部の間に明瞭な段差が認められる重厚なつくりが特徴的です。近年の研究成果にしたがえば、古墳時代前期前半段階の特徴とみることができるとは（水野二〇〇八）。いっぽう腸袂三角形形式の鉄鍔は、全国的に類例が乏しい形態です。その多くは古墳時代前期中頃以降の古墳から出土していますが、時期が降るにつれて次第に大型化する傾向が認められます（川畑二〇〇九）。その

点で比較すると、今回の出土例はもともと小型の製品となりますので、従来の類例よりも年代的に先行するあらたな事例とみることができそうです。

†古墳の年代

いま述べてきた土器や副葬品は、いずれも古墳時代が始まる頃のきわめて古い年代を示しています。もちろん、土器についてはやや年代の幅がありますから、今後それらを含めて古墳の年代に関する様々な意見が出てくるに違いありません。しかし、ここでもう一つ注目しておきたいのは、今回辻畑古墳から出土した副葬品の種類や組合せです。それは、東日本の中でもっとも古い時期に築かれたと考えられている前方後方墳の副葬品と大変よく似ているのです。表1は、東日本における出現期古墳の副葬品をまとめたものです。このうち、前方後方墳である長野県弘法山古墳と千葉県高部三二号墳からは、辻畑古墳と同じく上方作系浮彫式獣帯鏡が出土しています。しかも、高部三二号墳の鏡は破鏡として出土しており、鏡の種類は異なりますが、高部三〇号墳からは破砕鏡が出土しています。また、弘法山古墳では、鏡のほか玉、剣、槍、鍔、斧、鉈が出土していて、その組合せは辻畑古墳のそれとよく似ています。

表1 東日本出現期古墳の副葬品

墳墓名	所在地	墳形	規模 (m)	副葬品					
				鏡	玉	鉄剣	鉄槍	鐵	工具
辻畑	静岡県	■	59.5	浮彫式獸帯鏡1 (破砕鏡)	勾玉1	—	2	鉄鐵31(柳葉、腸扶柳葉)	鉈1
弘法山	長野県	■	63	浮彫式獸帯鏡1	ガラス小玉738 管玉2	1	2	銅鐵1(柳葉) 鉄鐵24(柳葉、定角)	鉄斧1 鉈1
高部32号	千葉県	■	32	浮彫式獸帯鏡1 (破鏡)	—	—	2	—	—
高部30号	千葉県	■	34	二神二獸鏡1 (破砕鏡)	—	2	—	—	—
神門5号	千葉県	●	(42.5)	—	ガラス小玉6	1	—	鉄鐵2(多孔)	—
神門4号	千葉県	●	(49)	—	管玉31 ガラス小玉394	1	1	鉄鐵41(定角)	—
神門3号	千葉県	●	(53.5)	—	管玉10 ガラス小玉103	1	1	鉄鐵2(柳葉)	鉈1

●:前方後円墳、■:前方後方墳/括弧内の数値は復元値。

個々の出土品の年代だけではなく、こうした副葬品の組合せなどをあわせて考えると、辻畑古墳の年代は、やはり相当に古いとみるべきでしょう。その結論は、出土品のさらに詳しい検討をまっとうしなければなりません。現状で判断する限り、辻畑古墳の年代は、奈良県箸墓古墳の年代に近接しつつ、それを遡る可能性があるともみてよいでしょう。

3 神明塚古墳の調査

十古墳の位置

近年、沼津市内では前期古墳に関するもう一つの重要な調査成果が得られました。それは、沼津市松長にある市の指定史跡、神明塚古墳に関する調査成果です。

神明塚古墳(図4)は、さきほどの辻畑古墳とは異なり、主な墳丘の部分が円形をなす前方後円墳です。JR片浜駅から東に約二〇〇メートル離れたJR東海道線沿いに位置して、地形的には、駿河湾に沿って延びる田子の浦砂丘上に立地しています。

この古墳については、その保存整備を求める地元の要望に応じ、一九八二年(昭和五七)に沼津市教育委員会

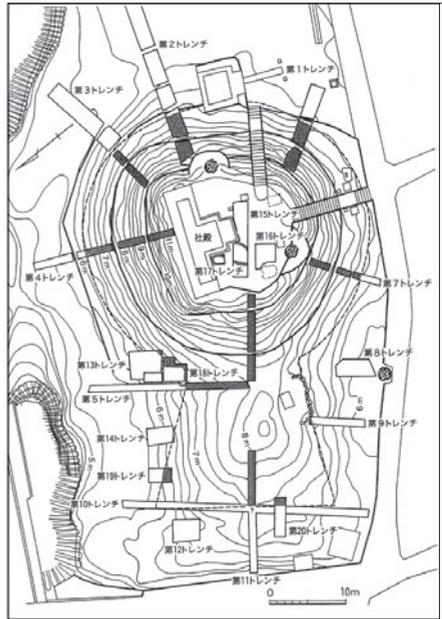


図4 神明塚古墳 (沼津市教育委員会 2005)

による発掘調査が行われました。ここでは、墳丘の範囲確認を目的として合計一七ヶ所のトレンチ調査が行われ、各トレンチからは多くの土器片が出土しました。それらの土器片は、一部の弥生土器片をのぞくと、すべて古墳時代前期の土器片でしたが、いずれも周辺に予想されていた古墳時代集落遺跡からの混入品と判断され、古墳にともなう土器であるとは考えられませんでした(沼津市教育委員会一九八三)。

この神明塚古墳のほか、沼津市内には二基の前方後円墳の存在が知られています。辻畑古墳と同じく愛鷹山麓に営

まれた長塚古墳と子ノ神古墳です。この二基の前方後円墳は、古墳時代中期後半から後期にかけて営まれたものと考えられていましたから、当時の調査者たちは、出土した土器を混入品とみなした上で、それら二基との連続性を重視して、神明塚古墳の年代を古墳時代中期後半と推定することになったのです。

ただし、古墳時代中期の遺物(土器)は一切出土していませんでしたから、私自身はその年代について再検討の余地があると考えていました。そうした折、沼津市史編纂事業の一環として、二〇〇三年(平成一五)に自らの手で神明塚古墳の部分的な発掘調査を行う機会に恵まれ、従来の見方に再考を迫るあらたな成果を得ることができたのです。

↑あらたな成果

一九八二年の調査ではかなり多くの部分で調査が行われていたため、二〇〇三年の調査では必要最小限の範囲に絞って三ヶ所のトレンチ調査を行いました。その結果、古墳時代前期の土器は墳丘の周囲に堆積した土の中から出土し、わずかに確認された墳丘の盛土中からは出土しませんでした。また、以前にもっとも多くの土器片が出土したトレンチは、その調査範囲が墳丘周囲の堆積土中にとどまってい

て、盛土中には達していないことも判明しました。つまり、これまで混入品としてきた古墳時代前期の土器は、この古墳で執り行われた祭祀に用いられたものである可能性が高いと考えられるようになったのです（沼津市教育委員会二〇〇五）。

この点に加えて、二〇〇三年の調査では神明塚古墳の年代を決定づける重要な発見がありました。それは、図5に示した底部穿孔二重口縁壺の発見です。この底部穿孔二重口縁壺は、土器を焼く前に底の部分に孔をあけてつくられたもので、当然のことながら、壺としての本来の使い方はできません。こうした土器は、古墳祭祀用の土器として古墳時代前期にひろく認められるものです。

図5は、出土したいくつかの破片をもとに図上で復元を行ったものですが、じつはそれらの破片の中であらたに出土したのは、底部穿孔が認められる底部の破片のみです。それ以外の破片は以前の調査ですべて出土していたものです

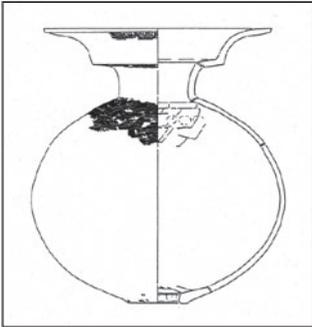


図5 神明塚古墳出土の底部穿孔二重口縁壺（滝沢編 2005）

が、それらの破片が出土したトレンチのすぐ脇であらたに調査したところ、問題の底部片が出土したというわけですが、これらの破片は互いに接合しないので、同一の個体であるという保証はありません。しかし、赤く塗られた器面の状態やその厚み、焼き具合などをみても、同じつくりの土器であることは明らかです。図5は、そうした認識にもとづいて作成した復元図ですが、実態をかかなりの程度反映したものと考えています。

神明塚古墳に関するあらたな調査の結果、これまで出土していた古墳時代前期の土器は古墳にとまなうものとみられること、また、前期古墳に特徴的な底部穿孔二重口縁壺をとまなうことが明らかとなりました。

それらの土器の詳しい編年的位置付けを検討すると、先ほど取り上げた廻間編年の中の廻間Ⅲ式前半に併行する時期とみることができま。この土器の年代を重視すれば、神明塚古墳は、辻畑古墳よりはやや遅れて築かれた前方後円墳ということになります。ただし、東日本において前方後円墳がひろく築かれるようになるのは、さらにその後の段階になりますから、神明塚古墳は、東日本の中でも比較的古い時期の前方後円墳であると言って差し支えないでしょう。

4 神明塚古墳の性格

十短い前方部

以上のような年代的理解をふまえつつ、次に墳丘の形態と埋葬施設の方向に着目しながら神明塚古墳の性格に迫っていきたいと思います。

まず、墳丘の形態についてみると、後円部の直径に対して前方部の長さが著しく短いという点が最大の特徴として挙げられます。あらたな調査によって確認された前方部前端的な位置をもとに測定すると、神明塚古墳の墳丘の長さは五二・五メートルとなります。そして、後円部の直径は約三七メートルと復元できますから、前方部の長さはその約二分の一ということになるわけです。通常の前方後円墳に比べて、かなり前方部が短いタイプとみてよいでしょう。

こうした前方部短小タイプの前方後円墳については、寺沢薫氏が「纏向型前方後円墳」と呼んでいる前方後円墳との関連が注目されます。寺沢氏は、初期ヤマト王権の王都と目される奈良県纏向遺跡の範囲に点在する墳墓のうち、箸墓古墳に先行して営まれた前方部短小タイプの前方後円墳を纏向型前方後円墳とし、それらの中にヤマト王権の最初の有力墓を想定しています。また、すでにその段階で、

それらと同じ規格の墳墓が各地に広がっている点も指摘しています。じつは、寺沢氏はその著書『王権誕生』（講談社、二〇〇〇年）を文庫版（講談社学術文庫版、二〇〇八年）に改訂した際、あらたに沼津の神明塚古墳を取り上げ、纏向型前方後円墳の分布図の中に示しているのです（図6）。この纏向型前方後円墳をめぐるのは、最古の定型化した巨大な前方後円墳である箸墓古墳との年代的な前後関係でとらえるので

はなく、箸墓古墳との階層的な関係でとらえようとする意見もあります。箸墓古墳周辺で纏向型前方後円墳とされるものの多くは、墳丘の大きさが箸墓古墳の三分の一度で

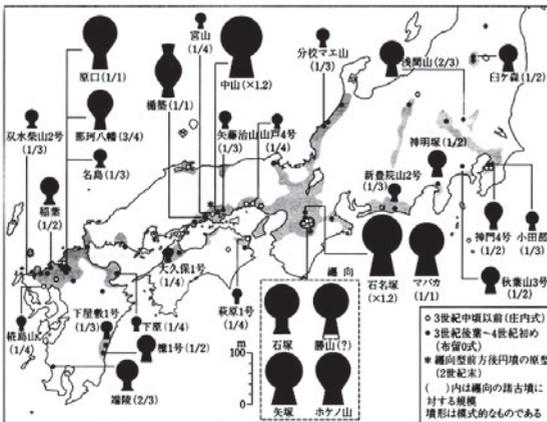


図6 纏向型前方後円墳（寺沢 2008）

すので、最上位墓としてはなく、活動期間を同じくする
 いわばセカンドクラスの人たちの墓として理解しようとい
 う考え方です。ここで、その可否を論じる余裕はありません
 んが、こうした纏向型前方後円墳をめぐる議論は、神明塚
 古墳の性格をみきわめる上で十分に注意すべき点であらう
 と考えています。そのように考えるもう一つの理由として、
 次に埋葬施設の方向に注目してみたいと思います。

†斜交埋葬施設の問題

神明塚古墳では、一九八二年の調査の際、後円部頂にあ
 る社殿の脇でも発掘調査が行われ、後円部の中心近くで埋
 葬施設が確認されています。わずかに上面の一部を確認し
 ただけですが、その埋葬施設は、木棺の周りを粘土で固め
 た粘土槨と呼ばれるものであると考えられます。内部の調
 査は行われていないので、それ以上の詳しいことはわかり
 ませんが、ここで注目したいのは、その埋葬施設が墳丘の
 主軸に対して斜めに交わる方向に設置されている点です。
 こうした斜交埋葬施設については、方位（北）との関係を
 指摘する見方もありますが、神明塚古墳の場合には、南北
 方向とも東西方向とも一致していません。

これまで墳丘の主軸方向や埋葬施設の方向などに関する

議論は数多くありますが、斜交埋葬施設を正面から取り上
 げたものとしては、大阪大学の福永伸哉氏による研究がい
 まのところ唯一のものと言えるでしょう。福永氏は、墳丘
 の主軸方向と埋葬施設の方向について整理し、前期古墳で
 は直交タイプと平行タイプが多数を占めているものの、斜
 交タイプも一定数存在し、それらの中には前方部が短いも
 のやいわゆる帆立貝式古墳とされるものが多いことを指摘
 しています(図

7)。また、そ

の起源は、前
 方後円墳定型
 化以前の墳墓
 の中に求めら
 れるのではな
 いかとも述べ
 ています。す
 なわち、斜交
 の意味につい
 てはなお検討
 の余地を残す
 もの、す

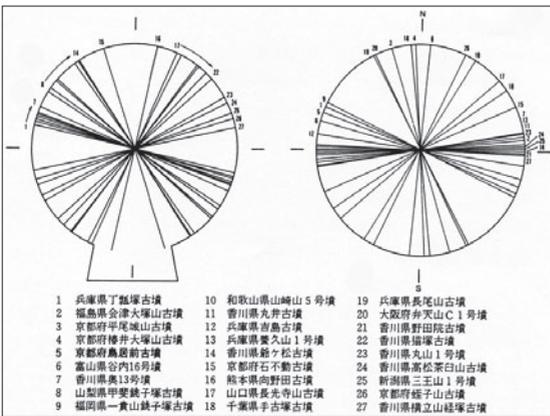


図7 墳丘主軸と埋葬施設主軸の関係(左)、埋葬施設の主軸方位(右) : 斜交タイプの古墳(福永 1990)

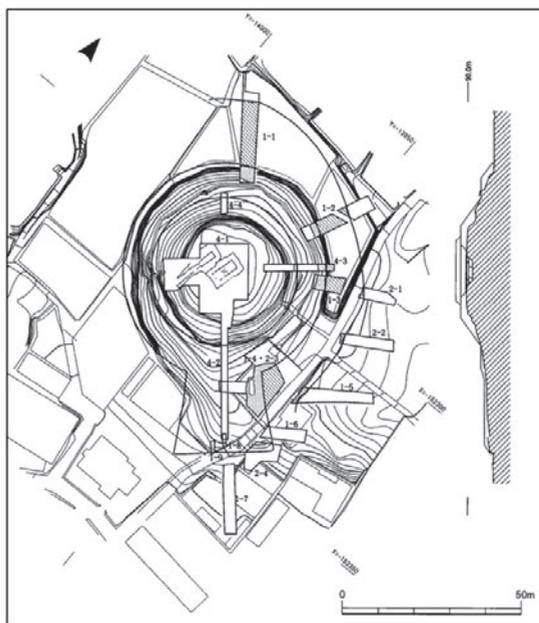


図8 奈良県ホケノ山古墳(奈良県立橿原考古学研究所 2008)

に古墳時代前夜に成立していた埋葬施設のあり方が、一つの企画として古墳時代以降にも継承されたのではないかというわけです(福永一九九〇)。

この問題を考えるとき、その後に行われた奈良県ホケノ山古墳(図8)の調査成果は大いに注目すべきものです。この古墳は、いわゆる纏向型前方後円墳の一つで、発掘調査の結果、その埋葬施設は墳丘の主軸に対し斜交していることが判明しました。この埋葬施設は南北方向を意識して

いるとみられますが、先の福永氏の見解をふまえるならば、短小な前方部を特徴とする纏向型前方後円墳において斜交埋葬施設が採用されていること自体が重要であろうと思います。

やはり斜交埋葬施設と短い前方部は、密接なかわりがあると考えざるをえないようです。その性格の解明は、神明塚古墳の問題にとどまらず、初期前方後円墳の性格にもかわる重大な問題をはらんでいると言えるでしょう。

†斜交埋葬施設の評価

斜交埋葬施設に関する福永氏の研究は、主に西日本の資料を対象として行われたものでした。そこで、東日本の資料についても丹念にみていきますと、やはり前方部が短小な前方後円墳に多くの事例を確認することができます。とくに、古墳時代の前期前半と後期に多くの事例が認められ、前者の中には、千葉県神門四号墳や神奈川県秋葉山三号墳など、出現期にさかのぼる前方後円墳が含まれています(図9)。東日本の前期前方後円(方)墳では、墳丘主軸平行タイプが主流ですので、それらの存在はいっそう際立っています。

地元の静岡県内に目を向けますと、神明塚古墳以外に、

古墳時代前期の浜松市馬場平古墳、中期の掛川市各和金塚古墳、後期の浜松市辺田平一号墳に斜交埋葬施設の例をみることでできま
す(図10)。それらもすべて、前方部短小タイプ
の前方後円墳です。

こうしてひろく事例を集めてみますと、斜交埋葬施設は、前方部短小タイプの前方後円墳を中心に古墳時代後期にいたるまで認められます。それは、共通した意識のもとに連綿と受け継がれているようにみえます。しかもきわめて重要なことは、斜交埋葬施設をともなう前方部短小タイプの前方後円墳は、少なくとも古墳時代中期以降においては主流となる前方後円墳の形態ではないという点です。前方部短小タイプの前方後円墳は、同時期の大型前方後円墳の周囲に築かれるなど、その従属的な性格を随所に示しています。

斜交埋葬施設をともなう前方部短小タイプの前方後円墳が、その当初から従属的な性格を帯びていたのか、あるいは初現期の形態

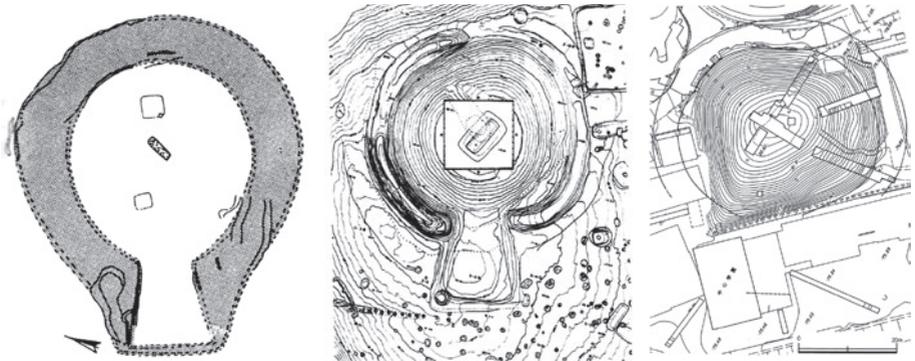


図9 東日本の斜交埋葬施設 (左) 千葉県神門4号墳、(中) 石川県宿東山1号墳、(右) 神奈川県秋葉山3号墳(縮尺不同)

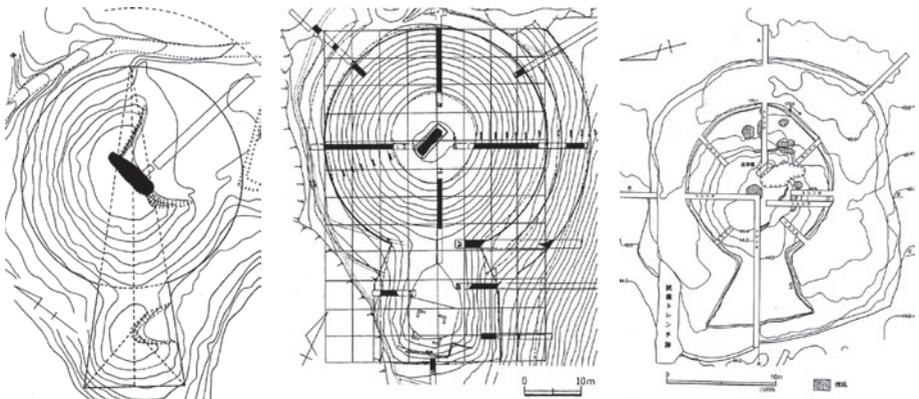


図10 静岡県内の斜交埋葬施設 (左) 浜松市馬場平古墳、(右) 掛川市各和金塚古墳、(右) 浜松市辺田平1号墳(縮尺不同)

として一定期間存在したのち、やがて従属的な性格を帯びるようになったのか、なお慎重な議論が必要であろうと思います。しかし、古墳時代後期にいたるまでそのかたちが受け継がれているとの見方に誤りがなければ、そこには強く意識された継続的な性格が読み取れるのではないかと考えています。つまり、そうした前方後円墳が比較的早い段階からより従属的な性格を帯びていたのではないかと想定しているのです。このことは、神明塚古墳の性格を理解するだけではなく、纏向型前方後円墳の性格を読み解く重要な手がかりとなるかも知れません。

5 古墳出現期の沼津

†東日本における古墳の出現

三世紀の中頃から後半にかけて、箸墓古墳に代表される大型の前方後円墳が、近畿から北部九州にいたる西日本の各地に築かれます。また、これに先立つ三世紀前半には、奈良盆地の東南部に突如として大規模な政治的拠点（纏向遺跡）が形成されます。

こうした一連の動きに中心的な役割を果たした勢力の実像については、研究者の間で意見が分かれています。ただ、

結果的にヤマトに拠点をおいした勢力が、西日本の諸勢力と連携しながらその後につづく政治的統合（ヤマト政権）の原型を形成したとみる点で多くの研究者の意見は一致しています。

いっぽう、同じ時期の東日本では、前方後円墳の面的なひろがりや認められず、各地の有力者の墳墓として一般的に採用されたのは、辻畑古墳のような前方後方墳でした。こうした状況については、初期のヤマト政権において東日本諸勢力の政治的立場が相対的に弱かったため、前方後円墳を築くにいたらなかったのだとする見方があります。しかし近年では、東日本における前方後方墳の起源が東海西部に求められるらしいこと、また、弥生時代の終わりから古墳時代前期にかけての東日本において東海西部の土器の影響がきわめて強いことなどを重視し、前方後方墳を共通して築いた東日本諸勢力の主体性や独自性を認めようという意見が強くなりつつあります。古墳時代前期のある段階まで、西日本は前方後円墳の世界であったのに対して、東日本は前方後方墳の世界であったとみるわけです。

今回の辻畑古墳の調査成果は、まさに以上のような問題を考えていく上で、きわめて重要な資料を提供するものですが、その詳しい検討は今後の資料整理をふまえて行わな

ければなりません。ここでは最後に、辻畑古墳や神明塚古墳が沼津の地に築かれたことの意味を、地域の視点から展望しておきたいと思います。

† 辻畑古墳と神明塚古墳

辻畑古墳の後方部頂からは、在地の土器である大廓式の大壺とともに、東海西部系の加飾壺など外来系の土器が出土しています。また、その周溝内からは、多くの在地系土器に混ざって、東海西部系の土器や北陸系、近江系の土器が出土しています。

辻畑古墳が築かれる以前の弥生時代後期には、愛鷹山麓に多くの方形周溝墓が営まれていて、それらの中にはやや大型のものも認められます。しかし、そこでの儀礼に用いられた土器は在地のものが主体で、辻畑古墳のように多くの外来系土器が用いられることはありませんでした。

こうした土器のあり方は、そこに葬られた人物やその人物を支えた集団の交流関係を反映している可能性が高いと思われまゝ。とすれば、辻畑古墳の被葬者は、在地社会に基盤をおきつつも、ひろく外部地域との交流を図ることに、それまでの有力者とは異なる卓越した地位を得ることになったと推測できるのではないでしょうか。長さ六〇

メートルの前方後方墳に葬られるような、まさに沼津最初の地域首長というべき人物の誕生には、外部地域との交流が重要な役割を果たしていたと考えられるのです。

辻畑古墳に遅れて築かれた神明塚古墳は、東日本の中では比較的早い時期に築かれた前方後円墳です。その大きな特徴である短小な前方部と斜交埋葬施設は、この古墳が典型的な前方後円墳の系譜とは異なるものであることを示しています。先に述べたように、この二つの要素に早くからの従属的な性格を認めるならば、その造営は、いち早く前方後方墳を築いた地域へのヤマト王権による積極的な関与を示したもののなのかも知れません。あるいは、辻畑古墳の内容からうかがえる広範な地域との交流が、より古い前方後円墳の形態を主体的に採用する契機となったのかも知れません。

この二つの見方以外にも、神明塚古墳の性格をめぐっては今後さまざまな意見が出てくるに違いありません。その際、短小な前方部と斜交埋葬施設の評価が重要な鍵となることを、ここでは強調しておきたいと思えます。

おわりに

近年、沼津を含む静岡県東部では、相次いで前期古墳の存在が明らかとなりました。今回詳しく紹介した二基のほか、三島市ではあらたに向山一六号墳が確認されています。向山一六号墳は、墳丘長約七〇メートルを測る新発見の前方後円墳で、墳丘確認調査の際に出土したわずかな土器片から判断すると、神明塚古墳とあまり変わらない時期に造営された可能性があります。また、富士市には静岡県内最大の前方後方墳である浅間古墳の存在が知られています。

こうしてみると、沼津を中心とする静岡県東部は、古墳時代前期に継続的に大型の古墳を築いたきわめて有力な地域であったことがわかります。そして、その中でもいち早く前方後方墳や前方後円墳を築いたのがこの沼津の地であり、それは東日本の中でも数少ない他に先駆けた動きであったとみられるのです。

これまで、東日本の太平洋沿岸では、房総半島の東京湾東岸地域にいち早く前方後方形や前方後円形の墳墓が築かれたことがわかっていきます。その学術的な評価は辻畑古墳の調査内容を詳しく検討した上で行わなければなりません。近年の調査成果は、この沼津の地が東京湾東岸地域と並ぶ

古墳出現期における太平洋岸の拠点地域であったことを物語っているように思えます。同じ頃この地域で用いられた大廓式土器は、近畿や関東さらには中部高地方面などにもたらされていますが、そうした交流の基点となった地域であることも、今回の調査成果によってあらためて理解できるのではないのでしょうか。

辻畑古墳が築かれた時期の前後、日常的な活動の拠点である集落のあり方にも大きな変化が認められます。弥生時代後期前半まで沼津の低地に営まれていた集落は、後半になると愛鷹山麓の標高百メートル付近に集中的に営まれるようになります。しかし、古墳時代前期になると、高地の集落は姿を消し、再び低地に集落が営まれるようになります。こうした弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての社会変動の中で辻畑古墳は造営されたと考えられるのです。集落と墳墓にみられる大がかりな変化がどのようにに関係しながら進行し、また、どのような社会の動きを反映しているのか。古墳出現期の沼津を多角的に把握していく作業は、今後の重要な課題と言えるでしょう。

補注

二〇一一年七月、「辻畑古墳」の遺跡名称は、地元住民の親しみやすさから、「高尾山古墳」に変更されました。ここでは、記録集としての性格を重視し、公開講座実施当時の名称を採用しました。

参考文献

* 今回の内容にかかわる主なもの。

愛知県埋蔵文化財センター 一九九〇『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第一〇集

岡村秀典 一九九三「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第五五集

川畑純 二〇〇九「前・中期古墳副葬の変遷とその意義」『史林』第九二巻第二号

滝沢誠 二〇〇五「浮島沼周辺の首長たち」『沼津市史 通史 編原始・古代・中世』沼津市

寺沢薫 二〇〇〇『王権誕生 日本の歴史02』講談社（講談社学術文庫、二〇〇八年）

奈良県立橿原考古学研究所 二〇〇八『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第一〇冊

沼津市教育委員会 一九八三『神明塚古墳』沼津市文化財調査報告書第二九集

沼津市教育委員会 二〇〇五『神明塚古墳（第二次）発掘調査報告書』沼津市史編さん調査報告書第一五集

福永伸哉 一九九〇「主軸斜交主体部考」『鳥居前古墳―総括編―』大阪大学文学部考古学研究室

水野敏典 二〇〇八「古墳時代前期柳葉式鉄鍔の系譜」『橿原考古学研究所論集』第一五、吉川弘文館

農耕文化形成期の沼津

篠原 和夫

はじめに

沼津市辻畑古墳や神明塚古墳の調査の成果は、沼津の地に東日本の中でもいち早く大型の古墳が造られたことを示しています。こうした古墳には、周辺地域を取りまとめるような地域的な首長というべき人物が葬られていたと思われる。このような大きな古墳が造られた背景には、すでに地域的な社会組織がある程度出来上がっていて、それを動かしていくような中心が存在したのでしょうか。つまり、地域の政治的な拠点もまた、すでに築かれていたことが考えられます。

このような、地域的なまとまりが形成されたきっかけは、やはり集約的な水稻農耕が開始されて、人々が農業を通じて協力し合うような社会が生み出されたことにあると考え

られます。そのような動きは、この沼津の地でも弥生時代の中期中葉頃に始まりですが、駿河湾と愛鷹山や伊豆・箱根の丘陵地に囲まれたこの地では、また独特の農耕文化の展開がみられます。その独自の様相を示す一つの現象として、古墳が出現する直前頃まで、愛鷹山の山麓に展開した弥生時代後期の高位置集落があげられます。このような集落が出現した背景には、当時の広域的な自然環境や社会環境の変化が考えられますが、一方で、人々がこのような丘陵斜面での生活を選択した理由には、またこの地域独特の環境とその利点があったといえるのだと思います。

以下では、まず、人々がこの沼津の地に住み始めて以来の歴史をたどりながら、その営みの特徴をつかんでみたいと思います。その上で、弥生時代以降の地域社会の基層として、この沼津の地で農耕文化がどのような特徴をもって

形成されたかを考えながら、その道筋をたどっていくことにしましょう。

1 沼津の原始文化と農耕文化の形成

†沼津の旧石器文化

まず、沼津にはどのような人が住み始めたのでしょうか。

沼津で最も古い人類の痕跡は、愛鷹山麓の約三万二千年前^(註1)と考えられる地層から、数点の石器や石片が発見されているものです。これらの石器は、現在、国内でも最も古いものの一つと考えられています。これ以降の旧石器時代の遺跡が愛鷹山麓ではたくさん発見されていて(図1)、約一万五千年ほど前の縄文時代が始まる頃まで、ほぼ間断なく石器群が見出されています。その中には旧石器時代の終り頃の石囲炉が初めて見つかった休場遺跡があり、国の史跡となっています。沼津周辺では愛鷹山麓のほか箱根山麓にもこうした遺跡が見つかりますが、その内容は、世界的にも注目される豊かなものです(沼津市二〇〇五)。

箱根山麓の三島市初音ヶ原遺跡では、二万七千年前頃の落し穴がたくさん見つかりました(図2)。谷に挟まれた丘陵の斜面上を横断するように、深さ一・五メートルもある穴



図1 沼津市北半部の旧石器時代主要遺跡の分布

が数条、列をなすように掘られたもので、人々が集団で追い込み猟を行った跡だと考えられています。穴を掘る道具が発見しているなかった時期に、このような大規模な遺構が発見されるのは、世界的にも極めてまれだといえます。しかし、愛鷹山麓でも同じ頃に掘られたこのような落とし穴が見つかっているのです。愛鷹山麓や箱根山麓のゆるい斜面と谷に挟まれた尾根線という条件がこのような猟に適していたのでしょう。この頃、人々が協力して落とし穴を掘

り、役割分担をしてシカなどの獣を追った生活があったようです。落とし穴が見つかるのは一時的なものなのですが、先ほど述べたように、その後も愛鷹山麓には旧石器時代の遺跡が展開していきます。

長く続いた旧石器時代は世界的な氷河期にあたり、寒冷的な気候が続いた時期です。愛鷹山南麓のような広大な南向き斜面地は、日当たりが良く、寒冷期でも植物や動物が生育しやすい環境が残されたのだと考えられます。旧石器時代の遺跡がそこに展開したのは、そのような豊かな環境を求めたものだったといえるでしょう。

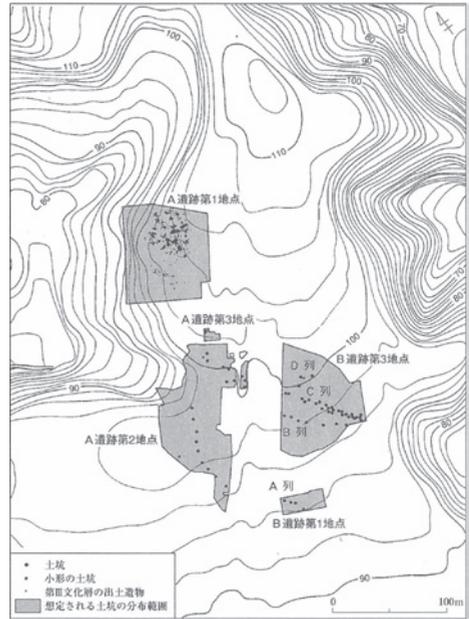


図2 初音ヶ原遺跡第IV文化層の土坑(落とし穴)配置

†縄文文化の変動

長く氷河期が続いたわけですが、一万六千年前頃からしだいに温暖化する時期が訪れます。縄文文化は、この温暖化する気候の中で現れた豊かな森林環境に育まれた文化だと考えられています。森林に生育する植物、動物を利用する中で人々は次第に定住の度合いを高めていったようので、縄文時代早期頃(一万七千年前頃)には、愛鷹山麓に縄文時代でも最も遺跡数の多い時期を迎えます(図3)。縄文



図3 沼津市北半部の縄文時代主要遺跡の分布

時代前期頃には、温暖化のピークが訪れ、縄文海進とよばれている海水準の上昇が起りました。浮島沼周辺や田方平野でも現在の丘陵地の裾部まで海岸が迫っていたと考えられます。こうした、海の資源を求めたとみられる集落も存在しますが、愛鷹山麓の縄文集落は、縄文早期を中心として中期頃まで、標高一〇〇〜二〇〇メートルの丘陵中腹部に多く営まれます。縄文人が利用した豊かな森林資源もまた、こうした愛鷹山麓の斜面地に求められたことがわかります。

縄文時代前期頃まで続いた温暖期は、前期末頃から冷涼化に向かい、後期・晩期頃にはさらに厳しい環境が訪れたようです。特に愛鷹山麓では遺跡が激減し、晩期には全く遺跡が認められない状況になるといいます。こうした後期・晩期頃の遺跡の減少は東日本の各地で起こったようです。

一方、冷涼化による海退などの環境の変化の中で、特に低地部では河川が運ぶ土砂の堆積が増えて、沖積地や砂堤の形成が進んだようです。愛鷹山の南裾に広がる浮島沼周辺は、この頃から富士川が運ぶ砂礫によって砂堤が形成されて、しだいに陸化していきます。雌鹿塚遺跡や雄鹿塚遺跡は、このような古い砂堤上の遺跡ですが、愛鷹山麓の遺跡に代わって、後期頃から人が住むようになったようです。

特に雌鹿塚遺跡では、縄文晩期後半頃、西日本系土器（突帯文土器）が見られます。西日本では、すでに稲作が始まりつつある時期ですが、設楽博己さんは、この雌鹿塚遺跡の西日本系土器から農耕文化の情報がこの地にももたらされていた可能性を考えています（沼津市二〇〇五）。いずれにしても、この時期の遺跡は、小規模で少なく、こうした状況が、弥生時代の前半期にも続いていきます。

↑沼津の弥生文化（図4）

東日本の太平洋岸では、本格的な水稲農耕が開始されるのは弥生時代の中頃（紀元前三〜二世紀頃か）以降であるといわれています（石川二〇〇一）。沼津周辺の弥生時代前半頃（前期〜中期前葉）は、縄文の系譜をひく条痕文系土器や浮線文系土器を出す遺跡が見られます。いずれも小規模な遺跡ですが、縄文時代以来の植物利用や狩猟・採集に加えて、雑穀などを栽培する畠作が行われていた可能性が考えられます。

弥生時代中期中頃から後半にかけては、最近、沼津でも本格的な農耕を営んだとみられる集落が明らかになってきました。二〇〇九年、辻畑古墳の調査が注目されるようになった頃、もう一つ沼津の弥生時代の遺跡の調査が注目さ

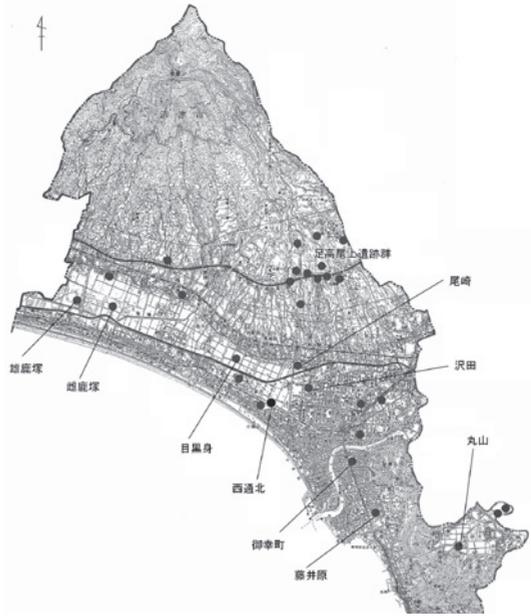


図4 沼津市北半部の弥生時代主要遺跡の分布

れました。浮島低地の東端に位置する西通北遺跡がそれですが、中期中頃の土器を出土する溝が発見され、環濠集落として話題を呼んだのです。沼津で最初の本格的な農耕集落と考えられるものですが、この遺跡については、後でふれることにします。他にも黄瀬川の扇状地や狩野川の低地部にはこの時期以降の集落や方形周溝墓群などが比較的多く知られています。しかし、中期の終わり頃になると遺跡がよくわからなくなる状況が生じるようです。

静岡では登呂遺跡に村ができた弥生時代後期頃（紀元一世紀頃）、浮島低地周辺には再び集落が現れてきますが、その多くは環濠集落として営まれます。目黒身遺跡や尾崎遺跡がそうですが、辻畑古墳の下層にも弥生時代後期の集落と溝が見つかっていて、ここにも集落を溝で囲んだ環濠集落があったようです。

弥生後期後半になると、それまで浮島沼の周縁部にあった集落は衰退し、愛鷹山麓の標高一〇〇〜二〇〇メートル付近に多くの集落遺跡が出現します（足高尾上遺跡群）。植出遺跡の調査では四〇〇軒ほどの竪穴住居が見つかっていますが、周辺にもこうした遺跡が広がるようで、かなりの人々が継続してこのような環境に居住したことがわかります。辻畑古墳が築かれたのは、おそらくこの丘陵上の集落が終焉を迎える頃だと思います。

沼津の旧石器文化から弥生文化に至る歴史の概略をお話してきましたが、沼津周辺の独特の地理的環境の中で、愛鷹山の山麓はたびたび人々の活動の舞台となってきたことがわかります。弥生時代の終わり頃、辻畑古墳出現の直前頃も愛鷹山麓には、独特の生活があったとみられます。それは、本格的に農業が始まった弥生時代の中頃から四〇〇年ほどの間に急速に形成された、農耕社会としての地域社

会が、さまざまな環境の変化に独自に対応していった姿だと考えられます。以下では、この沼津における農耕文化の形成と展開について、もう少し詳しく見ていくことにします。

2 農耕文化への胎動

† 農業の始まりの意味と日本列島の農耕の形成

縄文時代が始まる頃の温暖化は世界的な現象で、最終氷期の終わりからの温暖化によって、世界のいくつかの地域では豊かな環境が生まれたといわれています。それが一万二千年前頃再び寒冷化した時期があり(新ドリラス期)、効率的な食糧獲得が模索される中で、西アジアの小麦栽培や長江流域のコメの農耕などが発生したというのが、最近の農耕起源論です。農耕の発生から金属器の発明までの間を新石器時代と呼んでいます。イギリスの考古学者V・G・チャイルドは、人類が栽培と家畜の飼育を始めたことを「新石器革命」として一大転機に位置づけました。人類が自ら食糧を作り出すことが環境を変え、開発を進める文明社会への離陸点となったということは間違いありません。

では、日本列島の農耕のはじまりは、どのようなものだった

のでしょうか。日本列島では、弥生時代に大陸(韓半島)から渡ったコメ作りが農業のはじまりであり、水稲耕作の技術がしだいに発達したというのが定説でした。しかし、最近では、弥生時代に導入された稲作技術は、当初からかなり完成されたものであったことが示唆されるようになってきます。一方、古くから縄文農耕にかんする議論もありましたが、最近では、稲作に先行するアワ・キビなどの雑穀農耕の存在が追究され、弥生時代は両者が重層的に展開して形成された農耕文化であったと考えられるようになってきます。また、縄文時代の植物利用を再評価しようという議論も高まっていて、今村啓爾氏は世界的な視座から、すでにクリ・ヤマノイモなどの管理栽培やイノシシのキープングなどが見られる縄文文化を新石器文化の一類型として「森林性新石器文化」と呼んでいます(今村一九九九など)。また、最近、豆類(ダイズ・アズキ)などの栽培穀類が、縄文時代はかなり古い段階まで溯ることも明らかになってきました(中山二〇一〇など)。今後、狩猟・採集経済と考えられてきた縄文文化は、それと調和的な植物利用(栽培)や雑穀栽培(農耕)が追究されることによってその見方が変わってくるかも知れません。それとともに日本列島の農耕文化の枠組みも少なからず変更されることが予想さ

れます。

さて、日本列島の後の農耕文化につながっていく穀物栽培は、やはり西日本から始まったようです。縄文時代の後期から晩期頃には、西日本を中心に雑穀やコメが炭化物や土器の圧痕などとして発見されるようになってきていて、韓半島の畑作文化の伝播が考えられています（宮本二〇〇〇）。水稻耕作文化の伝播は、遅れて縄文晩期の後半頃に北部九州で始まるようで、水田跡も見つかるようになります、弥生時代早期とも呼ばれています。このような水稻農耕文化は、弥生時代前期の間に、北部九州から西日本や東海筋では濃尾平野あたりまで広がったようですが、静岡県が含まれる東海東部や関東は、その動きが最も遅く弥生時代中期の中頃を待たなければなりません。しかし、先ほども述べたように、中部地域でも、それに先行する縄文時代晩期後半から弥生時代中頃にかけて、最近、アワ・キビなどの雑穀やコメの栽培の証拠が見つかるようになりました。これは、土器に残された種実の圧痕からレプリカを作成して観察する方法が進展したことによります（中山前掲書）。ただし、こうした農耕を取り入れた文化は、いまだ本格的な農耕文化と呼ぶことはできないと思います。

このように、日本列島の一部に弥生時代に成立した農耕

文化は、重層的に形成されたものだと考えられますが、やはり水稻耕作の定着がそれを決定づけたようです。温暖湿润な日本列島の気候環境では、畑で作物を栽培しようとする雑草もまた盛んに生育します。水田と田植への技術は、雑草を排除して稲だけを有利に成育させるもので、生産性も高く、日本列島の気候風土に適したものとして定着していったと考えられます（今村前掲書）。

↑沼津（静岡）の農耕文化への胎動

先ほど述べたように、沼津周辺の縄文時代後・晩期から弥生時代前半頃は、遺跡が非常に少ない時期で、小規模な遺跡しかありません。弥生時代前期から中期前葉頃の大平丸山遺跡は、その頃の様相を示す遺跡の一つです。狩野川南岸の丘陵裾部の低地に位置する遺跡ですが、弥生時代中期前葉の丸子式土器とそれに併行する土器が多く出土しています（図5）。これらと一緒にイノシシやシカの獣骨が多く出土したことで知られるのですが、縄文的な狩猟が盛んに行われていたことが推定できます。一方、低地に立地し、土掘り具の打製石器が出土する点からは、小規模な農耕を営んだ可能性も考えられます。

この時期に農耕が行われたことが考えられる理由として、

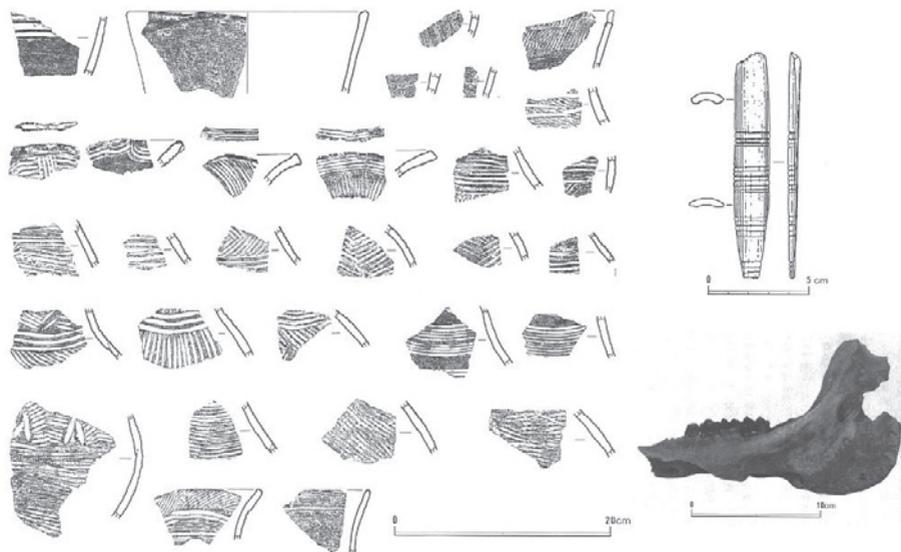


図5 丸山遺跡出土遺物

最近私たちが静岡市丸子地区周辺で行った調査を紹介しておきます。丸子地区は静岡市の安部川西岸に位置しますが、佐渡山という小高い山があって、その周辺は、古くから大平丸山遺跡と同じ頃の丸子式土器や大型の打製石斧（石鋏）が出土することで知られていました。私たちは、手越向山遺跡と呼ばれる佐渡山の東側斜面中腹を調査しました（静岡大学考古学研究室二〇一一）。まず、弥生時代中期後半の方形周溝墓と呼ばれる墓が発見されたのですが、その盛り土の下から、地面を耕したような跡が発見されたのです（写真1）。その痕跡は、地山の面に併行する数条の浅い溝として残っていましたが、その上の土は、分析の結果何度も掻き回されていることがわかりました。このような人為的造作は、今のところ畑以外のものとは考えにくいと思います。その土を研究室に持ち帰って洗った結果、炭化した種実が出てきましたが、その中に一点、アワかキビと考える



写真1 静岡市手越向山遺跡の畠状遺構

られるものがありました。この畑と考えられる遺構は、弥生中期後半より古い時期のもですが、周辺から出ている土器などから考えてやはり中期前葉の丸子式土器の時期のものと考えていいと思います。静岡清水平野では、同じ頃、瀬名遺跡などに低地で溝や耕作をしたような跡が見つかっていて、小規模な水田を営んだことも考えられます。私は、縄文時代以来の生業にこのような小規模な畑や水田の経営が加わるのが、この時期の生業の実態ではないかと考えています。

3 沼津の水稲耕作文化の形成

十 西通北遺跡の環濠集落

西通北遺跡（沼津市大諏訪・小諏訪）では、先ほど述べたように、二〇〇九年の調査で弥生時代中期中葉の集落をとりまくと考えられる溝（環濠）が発見されました（写真2・3）。現在のJR東海道線の北側に沿って調査が行われたのですが、溝は断面逆台形で、幅二・五メートル前後、深さ一メートル前後、北側に弧を描くように約一二〇メートルにわたって掘られていました。おそらく、この北側にあった集落部分を取り囲むように掘られたものでしょう。^(註3)



写真3 西通北遺跡環濠出土土器



写真2 西通北遺跡の環濠

遺跡は、浮島沼低地の東縁に位置していますが、シルト質の土壌の上に立地していて、環濠の底あたりからは縄文晩期後半頃の火山灰の層が見つかっています。このことから、この遺跡は、浜堤の上ではなく、黄瀬川や愛鷹山麓の小河川が形成した扇状地の末端部に位置していることがわかります。静岡・清水平野の弥生中期中葉に始まる有東遺跡や後期の登呂遺跡は、やはり安部川扇状地の末端付近に立地していて、そのような地点に特有の穏やかな水環境と微傾斜地を利用して水田を拓いたと考えられます（篠原二〇〇八）。西通北遺跡もまた、同じような弥生時代の水田が作られる土地条件といえるので、付近に水田を開発して経営した集落と考えてよいと思います。周囲には弥生中期後半の土器が多く出土した軒通遺跡があり、東方には、後期の集落として著名な沢田遺跡があります。西通北遺跡から始まって、この周囲に灌漑水田を経営する集落が広がっていったのではないのでしょうか。

先に、私は西通北遺跡の溝を環濠といいましたが、これには異論もあるようです。環濠集落は、弥生時代の周りを溝で囲った集落のことですが、佐原真さんなどが、「弥生時代に戦いがあった証拠だ」としたことから、「防衛施設足りうる溝が環濠だ」というような考えが広く受け入れられて

いるようです。西通北の溝は防衛施設としてはどうか、ということでしょう。しかし、戦いに備えたことを環濠の条件にするのは、少し本末転倒なことで、やはり溝で囲まれることが環濠集落の条件です。西日本で弥生前期の農耕集落が広がっていく頃や弥生中期後半に横浜の鶴見川流域に集落群が出現する頃など、新たな地点に農耕集落がつけられるときに環濠をもつ場合が多いのですが、西通北遺跡の例もこれにあたると思います。集落を作る目的は、そこに住む人々が協力して農耕を営み、生活していくことで、必ずしも戦いが目的ではない。寺沢薫さんは、「環濠の掘削やその後の維持管理は、防衛機能の保全よりもむしろムラの団結力の維持や共同幻想の強化にあつたのではないか」と言っています（寺沢二〇〇〇）。私も同じような考えで、周辺や他の地域から移動してきて、新たに形成される集落では、集落を囲い込むことでムラの求心性（共同性）が確保される。また、開発を推し進める集団を明示することは、他の集団との争いを避けることにもなったのだと思います（篠原二〇〇二）。こうしたことは、社会的にはむしろ重要な機能で、無文土器時代の朝鮮半島や弥生前期の西日本にも環濠集落があるわけですが、そうした長い農耕社会の経験の中で、一つの集落のスタイルとして培われてきたのが

環濠集落の姿ではないでしょうか。

西通北遺跡の環濠（集落）は、この地に新たに農耕集落が形成されて、多くの人が協力して農耕を営み、集団で居住したことを示しているのだと思います。

十三島市長伏六反田遺跡の方形周溝墓群

三島市長伏遺跡は、不明な点も多いですが、古くから知られる弥生時代中期中葉から後半の集落と考えられる遺跡です。ここでも、断面V字形の環濠の一部が見つかります。その南方の長伏六反田遺跡からは、弥生中期後半頃の一六基を超える方形周溝墓が発見されました（図6）。これらの方形周溝墓は、中心に埋葬された棺の周りを五〇メートル四方程の溝で四角に囲むものです。弥生中期の集落の周辺からは、静岡市有東遺跡、瀬名遺跡、横浜市大塚遺跡などがそうであるように、大規模な方形周溝墓群が発見されることが多いのですが、長伏六反田遺跡も長伏遺跡の墓域として形成されたものと考えられます。先ほどの西通北遺跡の周辺にも方形周溝墓群が存在するのではないかと思います。

こうした方形周溝墓もまた、農耕を始めた頃の集団の性格をよく示しているのではないかと思います。方形周溝墓

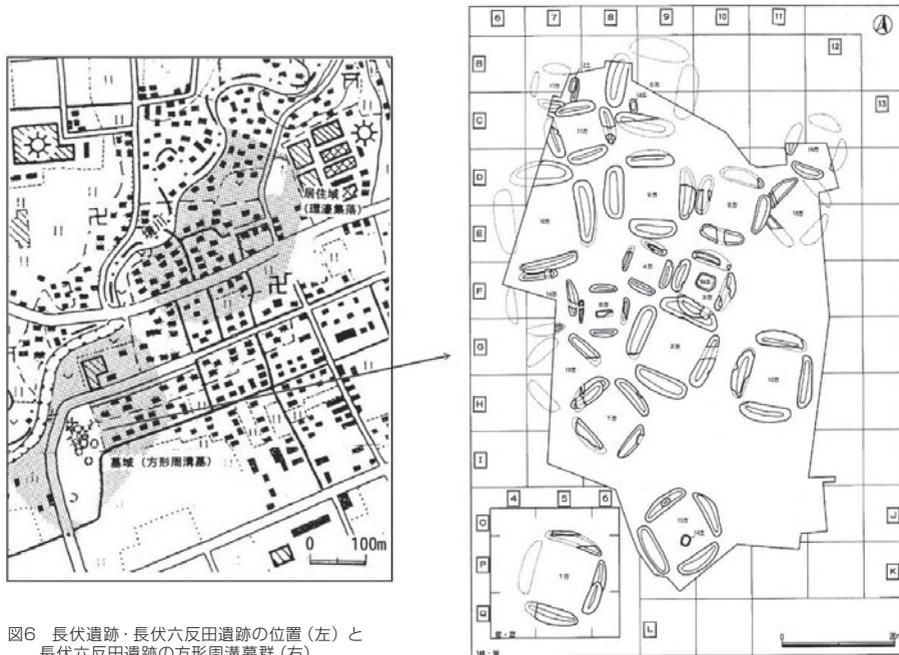


図6 長伏遺跡・長伏六反田遺跡の位置（左）と長伏六反田遺跡の方形周溝墓群（右）

はかなり大型の墓に一人が葬られるもので、総延長十数メートル以上の溝を掘って土が盛り上げられます。単独の土坑墓などに比べればかなり手厚い葬法だといえるでしょう。先に述べたように、一つの集落でもその数は多く、集落のリーダーや長老などに限定されない多くの人が手厚く葬られたのだと考えられます。弥生中期の集落では、多くの人が集団で居住し、協力して水田の開発や経営をおこなったわけです。誰かが亡くなったら協力して墓を作って手厚く葬る。自分や身内が亡くなった時もそのように手厚く葬られるだろうという期待感は、やはり集落の人々の結束を強めたのだらうと思われまます。

このように弥生社会では、耕地を開発維持し、さまざまな生業を営んでいく上で、人々の協力が求められたのだと思います。それを維持強化していくための集落のスタイル、墓制、ここでは述べませんが、さまざまな祭祀がその社会の仕組みの中に組み込まれていたようです。

4 開発と地域社会の進展

↑ 浮島沼周辺の弥生後期前半の低地集落

沼津周辺の弥生中期終末頃の遺跡はきわめて少なくなり、

後期になって再び集落が増加します。なんらかの環境変化や集団の変動が推定されますが、よくわかっていません。後期前半になって、浮島沼周辺には、新たに沢田遺跡、尾崎遺跡（環濠）、目黒身遺跡（環濠）、豆生田遺跡、雌鹿塚遺跡などの集落が現れます（図7）。環濠をもつ集落が多いのですが、個々の集落の規模はそれほど大きくなく数が多いのも特徴でしょう。尾崎遺跡では、集落の最初の段階に環濠が掘られることがわかっていますが、これらの環濠集落も先に述べた西通北遺跡などと同じように、新たな開発に際して作られたものだと思います。

後期の集落では、中期の段階に良くわからなかった生業の実態を示す遺物が多く出土しています。低湿地に位置する沢田遺跡や雌鹿塚遺跡、田方平野の山木遺跡などからは、鍬、鋤、エブリ、田下駄、堅杵、白など農耕に関する道具類や建築材、繊維具、容器、弓、祭祀具など豊富な木製品が出土しています。また、有頭石錘はこの地域に特徴的な漁具です。水稻耕作を基盤に狩猟、漁労などもおこなう生業が推定されます。広範囲に広がった各集落で開発がおこなわれたでしょう。

石器は伐採や加工用の磨製石斧が出土します。一般には後期になると石斧は激減して消滅していくので、鉄器が普

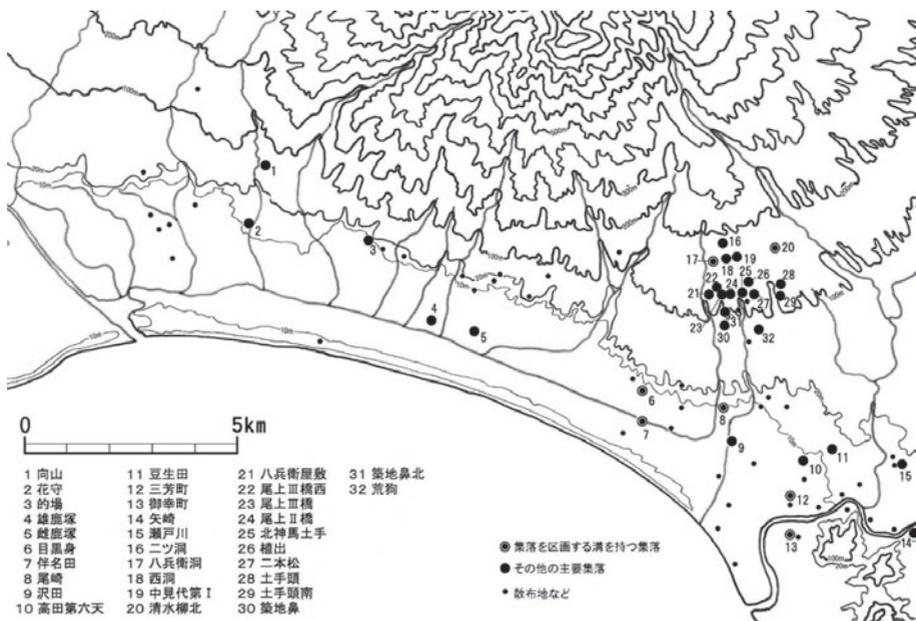


図7 浮島沼周辺の弥生時代後期の遺跡

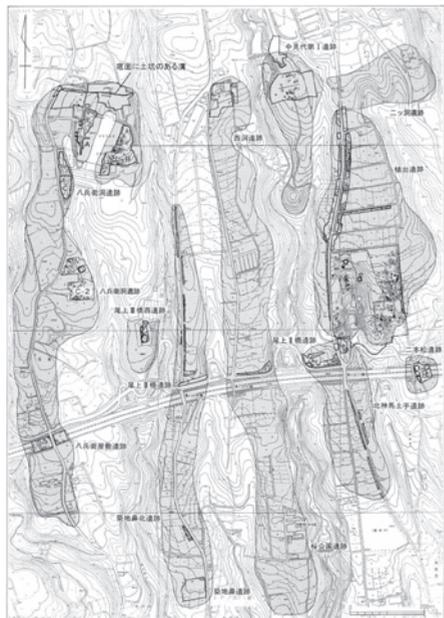


図8 足高尾上遺跡群全体図

及したのではないかと考えられていますが、この地域では利器として石器が残っていくのが特徴です。しかし、後期になって特に豊富に出土する木製の道具類や資材は、盛んな集落形成や開発の進展を示すものと考えられます。

↑丘陵上の大集落——足高尾上遺跡群の形成

後期中頃になると浮島沼周辺の集落の多くは終息を迎え、代わって愛鷹山麓の標高一〇〇メートルを超える地点にかなりの規模の集落が出現してきます。代表的なものは足高尾上遺跡群（図8）で、東名高速道路沼津インター西側か

ら免許センター付近にかけての標高八〇〇〜一八〇メートル付近、東西二キロメートルの範囲に、八兵衛洞、北神馬土手、植出などの多くの住居を構える集落が分布しています。

これらの集落は、水田が営まれる低地部からはかなり離れて立地するわけですが、どのような生業を営んだのでしょうか。これにかんして、植出遺跡や八兵衛洞遺跡などでは畑に関連すると考えられる溝が住居に近接して発見されています。植出遺跡(図9)では、中央の谷部分に格子状に交差する溝群(図10)が、台地上の集落域にも並行する溝

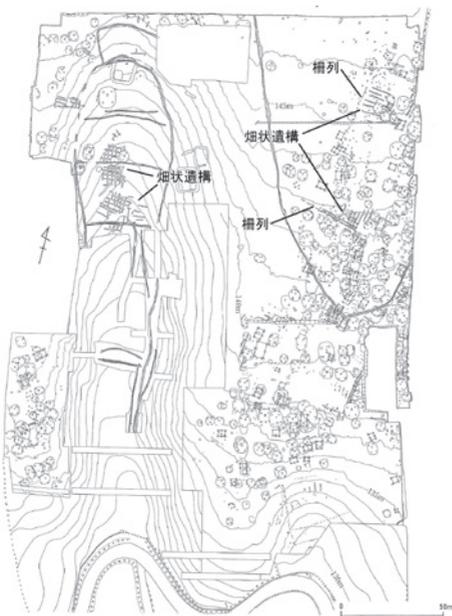


図9 植出遺跡全体図



図10 植出遺跡の畠状遺構

群が発見されました。溝は幅二〇〜五〇センチメートル、深さ一〇〜三〇センチメートルでややまちまちですが、どの溝も比較的急角度で掘り込まれています。溝の間隔も一・五メートルほどから四メートルを越えるものなど様々です。竪穴住居と切り合いがあるものもあって、住居を切るもの、切られるものの両者があることや弥生後期の完形土器が出土した溝もあることから、弥生後期の集落と同時期に住居とこの遺構が替わる替わるに作られたことは間違いありません。また、一部で加藤芳朗さんによって作土と考えられる土層の分析が行われていて、根跡密度の分析などから畑として矛盾ないという結果が得られています。

報告書では、畑状遺構としてそれが畑とどのようにかか

わかるかは明言していませんが、私は、これが仙台市の佐藤甲二さんが示している「天地返し」の跡としての「畑の耕作痕」（佐藤 一九九八）と良く似ていると思っています。畑は連作すると地味が落ちるので、それを回復するための方策の一つとして、下層の土を掘り起こして攪拌する天地返しが行われる場合があります。佐藤さんが示した天地返しの特徴とこれらの畑状遺構の特徴は良く似ているのです。もしそうだとすると、これらの畑状遺構は地力の回復を行いなながらある程度長期間使用されたことが考えられますし、格子目に交差する溝群は、それが複数回行われた可能性も示しています。丘陵上部の畑状遺構は周囲に直交や並行する柵列があつて、それによって区画されているように見受けられます。天地返しが行われていない畑は確認できていないとすると、整然と区画された畑がかなりの広範囲に広がつていたことも予測できます。また、ここに居住域が重複することは、居住域と畑の切り替えが行われていたことも考えられるわけです。足高尾上遺跡群の畑は、現在想定されているよりも大規模・集約的で、長期的に経営された可能性があります。

一方、足高尾上遺跡群の北端（丘陵の上部）に位置する八兵衛洞遺跡では、尾根線を東西に横断して掘られた環濠

と同じ形態の断面V字形の溝が発見されました。さらに八兵衛洞遺跡では、溝の中に落し穴と考えられる大型の土坑が多数掘られている状況も確認されています。集落群の北側（尾根の上位）から、外部の人間が侵入するとは考えにくいので、区画や排水のほか、獣の排除や捕獲の機能をもつたものであることが明らかです。畑地にイノシシが入り込むと大変なことになるのは良く知られたことだと思いますが、足高尾上遺跡群が、広い畑地を構えた集落群だったとするなら、防獣は切実な問題だったことでしょう。この溝と土坑群はまさにそれを示しているのではないのでしょうか。

足高尾上遺跡群では、石錘や浮子といった漁労具が発見された遺跡もあります。植出遺跡や八兵衛洞遺跡では、住居跡や土器から炭化米も検出されています。畑で何を作ったかは不明ですが、この時期に陸稲があつたかも不明で、コメは水田で作つたと考えた方が良くかも知れません。こうしたことから、低地や海洋まで行き来していたことが推定され、低地部で水稻耕作もおこなっていた可能性も考えられます。

十 集落の移動の理由

浮島沼周辺と愛鷹山麓の後期の集落の動向からみると、

後期前半の低地集落が、後半にかけて丘陵上に移動した可能性が高いと思われます。低地部のなんらかの環境や社会的動向の変化が推定されるわけです。時期的には倭人伝の倭国大乱の時期とも重なりそうですが、果たしてどうでしょうか。

静岡市の登呂遺跡や浜松市伊場遺跡では、後期の中頃にかけて集落が洪水に見舞われることが知られています。そうした低地環境の変化が浮島沼周辺でも起こった可能性は十分に考えられます。最初に見たように、愛鷹山麓の弥生後期の高地集落が立地する地点付近は、旧石器時代や縄文時代にも遺跡が営まれた地点です。低地の居住を放棄するとき、むしろ次に居住と生活に適した環境は、そのような高位置の丘陵部であった可能性もあります。また、弥生中期前葉の手越向山遺跡の畠状遺構もまた丘陵の斜面地に作られたものでした。日当たりの良い南向き斜面地は、まだ良く検討されていない土壌条件なども含めて、畑作の適地であったのでしょうか。

足高尾上遺跡群で想定された畑作は、初期の畑作に与えられがちな粗放なイメージとは異なり、計画的に耕作地を造成して管理した、ある程度大規模・集約的な畑地であった可能性が考えられます。それは、弥生時代に形成された

本格的な農耕社会が、地域的な環境の変化に適應しようとした一つの姿であったのでしょうか。

一方、より厳しい環境で大きな集団が限られた範囲に居住していくことは、おそらく社会的な負荷を内包していたのだろうと考えられます。そのような集団組織をなんらかの形に変えて昇華させていこうとするような欲求は、集団内にも潜在していたのではないのでしょうか。

また、沼津周辺の弥生後期集落が、すべてこのような高位置に移動したわけではないようです。狩野川下流の微高地にある御幸町遺跡は後期前半から後半にかけて継続して集落が営まれ続ける遺跡です。狩野川にたいしては香貫山の背後にあつて、低地でも環境の変化の影響を受けにくかったのかもしれない。

5 広域的な交流の開始と古墳の出現

古墳時代初頭頃（廻間Ⅱ式頃）になると、弥生時代の交流圏を大きく越えた、土器の広域交流が見られるようになります。沼津の周辺にも見られるようになる外来系土器を見ると、その発信地となったのは伊勢湾岸や近畿地方、北陸地方などでした。いち早く政治的な社会組織や首長墓祭

祀を創造しつつあったそれらの地域との交流の開始が、この地域に内在する矛盾を昇華するきっかけになったことは想像に難くありません。そうした墳墓として最も古いものの一つは、富士宮市丸ヶ谷戸墳丘墓（写真4）で、辻畑古墳と同じ前方後方形をした周溝を持つ



写真4 富士宮市丸ヶ谷戸遺跡前方後方形墳墓

ていて、墳長二六、二メートルを測ります。この前方後方形墓と近接する方形の竪穴住居の土器は接合関係を持つているのですが、それらには伊勢湾岸や畿内、北陸地方など各地の土器が含まれていました。

同じ頃、静岡市汐入遺跡（図11）や浜松市大平遺跡では、集落の内部を居住域や祭殿、倉庫などの機能に分けて溝や堀で方形に区画する集落が見つかっています。こうした集落は、経済や祭祀の機能を集中させる、いわば政治的な集落といえるでしょう。沼津周辺でも時期は少し下りますが、

藤井原遺跡は、そうした集落である可能性があります。こうした動きが始まってまもなく、初めて大型の前方後方墳として築造されたのが辻畑古墳だと考えられます。

まとめ

沼津周辺は、浮島沼低地と愛鷹山、狩野川低地と伊豆・箱根の丘陵部といった多様な環境を有しています。旧石器時代や縄文時代の自然環境を利用する生活の中で、盛んに利用されたのは、愛鷹山麓などの丘陵斜面地でした。弥生時代中期

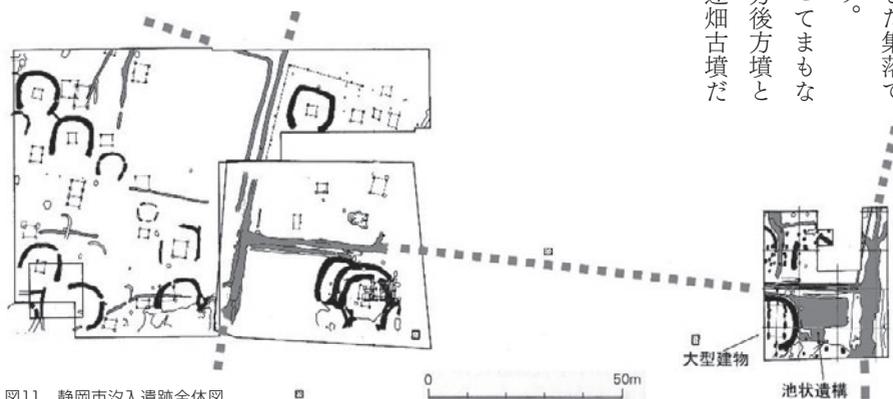


図11 静岡市汐入遺跡全体図

の中頃になると、この地域にも初めて本格的な農耕集落が現れます。西通北遺跡の環濠集落は水田耕作に適した浮島沼東縁の扇状地末端に位置していました。この時期以降、多くの人々が耕地の開発や経営を通して協力し合う農耕社会が芽生えます。弥生後期になると、おそらくしだいに冷涼化する気候や鉄の普及といった周辺状況に呼応してにわかに関濠が進展したようです。生業は、農耕を中心としながらも周辺の海、沼、山にも適応してやや多様なものになったようです。しかし、やがて訪れた低地環境の変化は、愛鷹山麓のような高位置への集落の移動と集住を余儀なくしました。しかし、そこでの畑作を取り入れた生活もまた、ある程度成熟した農耕社会が、新たな環境に適応した一つの姿を示しているようです。

弥生中期から後期までの数百年の間に、沼津の初期の農耕社会はめまぐるしく変化しながらも、多様な環境に適応した地域社会を形成してきました。一方、それが内包していた矛盾に、内外からの新たな動きが加わったとき、辻畑古墳に象徴される古墳文化が始まったといえるでしょう。

註

(註1) 本文章で示した年代は『沼津市史 通史編』(沼津市二〇〇五)を参考にした。このため旧石器時代の年代は非較正の炭素年代、それ以外は較正された炭素年代を用いている。

(註2) 現在、報告書が刊行されている(静岡県埋蔵文化財調査研究所二〇一一)。

(註3) この後、二〇一〇年の沼津市による調査で、溝の北側に沿った柵列と竪穴住居跡二棟が発見されている。

参考文献

石川日出志 二〇〇一 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第一一三号

今村啓爾 一九九九 『縄文の実像を求めて』吉川弘文館

小泉祐紀 二〇〇二 「愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動態」『弥生集落論』中部弥生時代研究会

佐藤甲二 一九九八 「畑跡の畝間と耕作痕について—仙台地域の考古的事例から—」『人類誌集報1998』

静岡県埋蔵文化財調査研究所 二〇一一 『西通北遺跡』

静岡大学考古学研究室 二〇一一 『手越向山遺跡の研究』

篠原和大 二〇〇二 「環濠―静岡県における弥生時代後期環

濠集落の理解に向けて―」 『静岡県における弥生時代集

落の変遷』

篠原和大 二〇〇五 「神明塚古墳出現前後の地域様相」 『神

明塚古墳（第2次）発掘調査報告書』 沼津市教育委員会

篠原和大 二〇〇八 「静岡・清水平野における弥生遺跡の分

布と展開」 『静岡県考古学研究』 四〇〇

寺沢薫 二〇〇〇 『王権誕生 日本の歴史02』 講談社

中山誠二 二〇一〇 『植物考古学と日本の農耕の起源』 同成

社

沼津市 二〇〇二 『沼津市史資料編 考古』

沼津市 二〇〇五 『沼津市史通史編 原始・古代・中世』

宮本一夫 二〇〇〇 「縄文農耕と縄文社会」 『古代史の論点』

一

図6…近藤舞 二〇〇〇 「駿豆地方の弥生時代中期後半の遺

跡群」 『静岡県考古学研究』 三二一

図7…篠原 二〇〇五

図8…沼津市教育委員会 二〇〇四 『八兵衛洞遺跡発掘調査

報告書』

図10…静岡大学考古学研究室 二〇一一

図11…藤枝市 二〇一〇 『藤枝市史通史編上』

写真1…静岡大学考古学研究室

写真2・写真3…静岡県埋蔵文化財調査研究所 二〇一一

写真4…富士宮市教育委員会 一九九一 『丸ヶ谷戸遺跡』

図の出典

図1・図3・図4・図5・図9…沼津市 二〇〇二を改変

図2…白石浩之 二〇〇二 『旧石器時代の社会と文化』 山川

出版社（日本史リブレット）

古墳時代後期の東駿河の様相

埋葬施設からみる特徴

はじめに

この公開講座では、篠原先生が弥生時代、滝沢先生と私が古墳時代についてお話をしますが、本題に入る前に、今日の講座で私がお話しする「古墳時代後期」と「東駿河」の範囲について、簡単に説明します。

「古墳時代」といった場合、三世紀後半から六世紀代を指すことが一般的です。ただし、近年は古墳時代の始まりはもう少し遅るという意見もあります。また、古墳時代の終わりについても、もう少し遅い、七世紀代までを含める場合もあります。七世紀代は、飛鳥時代とも呼ばれ、律令国家への移行が見られる時期です。しかし、依然として古墳が造られ続けられる地域も多くあります。静岡県もその一つであり、七世紀代に至っても古墳の規模や副葬品等に当

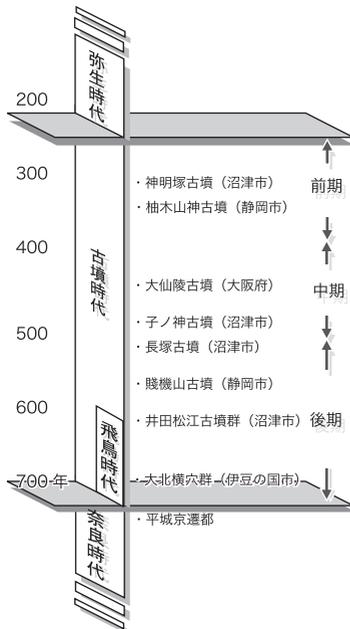


図1 古墳とその時代

時の社会状況などが如実に反映されています。そこで、ここでは、この時期までを「古墳時代」として扱うことにします。

さて、短くみても三世紀半、長くみれば約五世紀にわたって続く「古墳時代」ですが、初めから終わりまで、その様

菊池 吉修

相が一樣であった訳ではありません。副葬品の内容や、埋葬施設の状況などから、幾つかの時期に細分されることがあります。一般的には三時期に区分されますが、この場合、概ね四世紀代までを古墳時代前期、五世紀代を古墳時代中期、六世紀代以降を古墳時代後期と呼称します。(図1)。

次に取り扱う地域ですが、ここでは、静岡市の「薩埵峠」から三島市と清水町の境の「境川」までを「東駿河」と呼ぶことにします。もともと、「東駿河」のことを理解するためには、隣接地である「伊豆」及び「西駿河」との対比が必要になります。そこで両隣の地域と比較しながら話を進めていくことにします。

つまり、今回の講座では六世紀から七世紀代における「駿河・伊豆」という現在の静岡県東半の様子を概観しながら、その中で「東駿河」がどのような特徴を持った地域であるか、お話をします。なお、「伊豆国」は六八〇年に駿河から分置されるので、「伊豆」は今回報う六〜七世紀においては駿河の一部であったといえます。

前期〜中期の古墳と後期の古墳

ところで、「古墳」と言った場合、イメージに浮かぶのは、

大阪府の大仙陵古墳や菅田御廟山古墳、あるいは奈良県の箸墓古墳などの大きな前方後円墳でしょうか。これらの一般的に紹介される巨大な前方後円墳のほとんどは、前期〜中期につくられる古墳です。静岡県を代表する

全長約百十メートルの磐田市堂山古墳は中期、静岡市の柚木山神古墳は前期の前方後円墳です。

それでは、後期の代表的な古墳といえますと、まずあげられるのは、奈良県の藤ノ木古墳でしょうか。この古墳は二〇年ほど前に話題になったのでご存じの方も多いかと思えます。静岡県内では静岡市の賤機山古墳が古墳時代後期を代表する古墳といえます。この二つの古墳は、前方後円墳ではなく、円墳です。

古墳時代後期にも前方後円墳は存在します。ただし、全国的にみても中期に比べると大型の前方後円墳は少なくなり、築造数も減少していきます。そして六世紀から七世紀

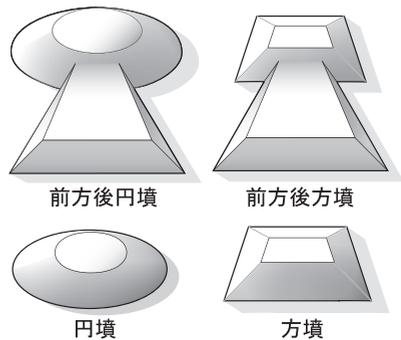


図2 古墳のかたち



図3 石川古墳群の古墳分布

に移行するころ、前方後円墳の築造は終焉を迎えます。つまり、古墳時代後期は前方後円墳が造られる最後の時期といえます。なお、古墳時代後期になると前方後円墳が小型化する一方で、これまで前方後円墳がみられなかった地域にも造られるようになります。駿河の場合、藤枝市を中心とした志太地域、静岡市の安倍川西岸などが典型例であり、

伊豆の国市の駒形一号墳もその例といえます。

古墳の分布については、もう

一つの特徴が後期の古墳にはあります。それは、一定の範囲に非常に密集して古墳が造られることです。図3は沼津市の石川古墳群ですが、白点は今までの古墳

です。このような古墳の集まりを、一定範囲に「群れ」「集まる」「古墳」であることから「群集墳」と呼びます。そしてこのような群集墳が各地に形成されることが古墳時代後期の特徴の一つです。

前方後円墳が小型化し、やがて消滅していくつぼうで、このような古墳群が多数形成されます。そのため古墳の築造数でみると、後期の古墳は前期・中期の古墳の合計よりも多く、古墳時代を通じて最も多くの古墳が造られる時代ともいえます。図4は前期・中期の古墳の分布、図5は後期の古墳の分布ですが、前方後円墳の分布域、古墳の築造数の違いがわかるかと思えます。

古墳の分布状況の違いに加え、古墳時代後期には、もう一つ大きな変化が現れます。それは、埋葬施設です。埋葬施設というのは、死者を埋葬するための施設のことですが、前期から中期の古墳で一般的にみられるのは、「竪穴系」と呼ばれる埋葬施設です。いっぽう、後期の古墳においては「横穴系」と呼ばれる埋葬施設が主流となってきます。「竪穴系」と「横穴系」の違いについては、後ほど改めて説明しますが、後期の古墳は前期と違った埋葬施設が主流になります。

以上をまとめると、古墳時代後期の特徴としては次の三点が指摘できます。一つは、前方後円墳が造られる最後の

時代、二つ目は、古墳時代の中でも非常に多くの古墳が密集して造られる時期、三つ目は中期とは違った埋葬施設が広まる時期、といえます。

なお、当時の社会を知るには、当時の人々が暮らしていた集落や食料・道具などを生産していた生産遺跡についても調べ、静岡県におい

ては、ここで取り上げる七世紀代が一番多くの古墳が造られる時期にあたり、数百基におよぶ古墳は当時の社会状況を反映していると良好な資料です。ここでは古墳、特に埋

葬施設の状況から当時のこの地域について考えてみることにしましょう。

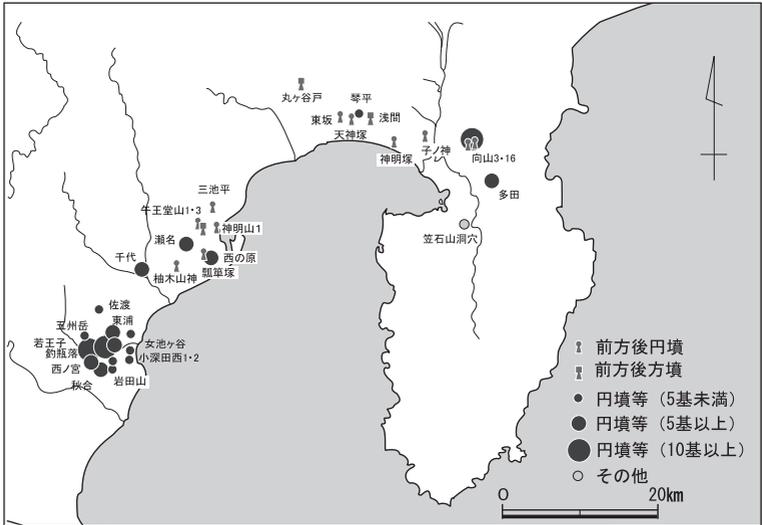


図4 古墳の分布 (前期～中期)

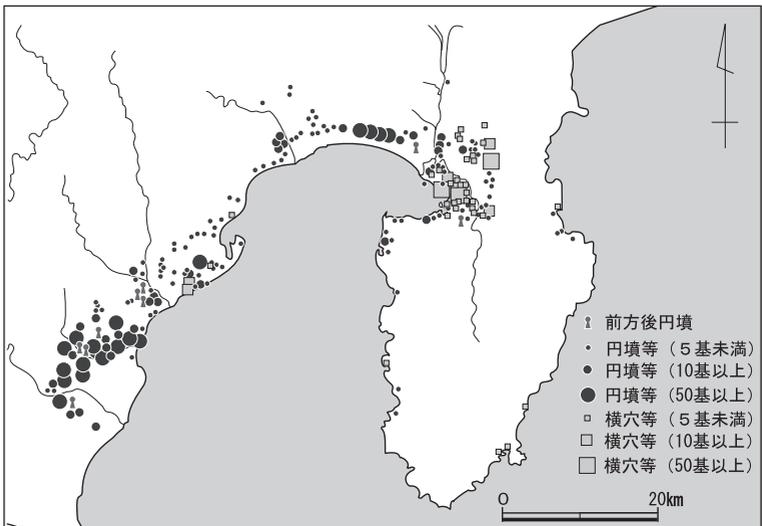


図5 古墳の分布 (後期)

埋葬施設から見た東駿河の特徴

十 「堅穴系」と「横穴系」の埋葬施設

東駿河の古墳時代後期の様子を埋葬施設から探るにあたって、先ほど前期～中期の古墳と後期の古墳の違いで触れた「堅穴系」の埋葬施設と「横穴系」の埋葬施設の違いについて説明をします。

「堅穴系」と「横穴系」の違いは、死者を埋葬する際に古墳の中に死者をどこから葬るか、埋葬したあとその死者を埋葬した空間をどのように扱うか、そして埋葬される人数に違いがあります。

まず、死者を埋葬する際の違いですが、「堅穴系」の場合、死者は埋葬施設の上側から埋葬施設の中に安置します。死者を埋葬する空間は上部が開放されることで外部とつながることができず。いっぽう、「横穴系」においては、埋葬空間の横側に外部とつながる通路をもち、死者はここから埋葬施設に葬られます。外部とのつながりが上部にあるのが「堅穴系」の埋葬施設、横方向にあるのが「横穴系」の埋葬施設です（図6）。

つぎに、埋葬した後ですが、「堅穴系」の場合は埋葬施設を土などで被覆し、土中に埋め尽くしてしまいます。「横穴系」の埋葬施設の場合、外部と通じる通路の出入り口を石等で塞ぐだけです。

そして、埋葬される人数ですが、「堅穴系」は一人を埋葬すると埋葬施設を土等で覆ってしまうので、新たな死者を埋葬施設に入れることは困難になります。そのため基本的には一つの埋葬施設に葬られるのは一人だけです。いっぽう、「横穴系」は外部との通路を塞ぐ石等をとけることで、

新たな死者を埋葬施設の中に入れることができます。一つの埋葬施設に死亡時期の異なる複数の人を葬ることができます。「堅穴系」の埋葬施設は一人のためのもの、「横穴系」の埋葬施設は複数人を葬るためのものと言い換えることができます。実際の発掘調査でも、「横穴系」の埋葬施設からは、数人分の

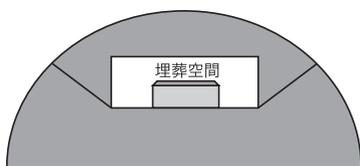
人骨が発見される例が少なからずあります。

それでは、

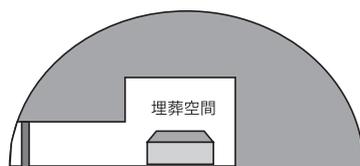
「堅穴系」と

「横穴系」の

実例を少し



堅穴系の埋葬施設



横穴系の埋葬施設

図6 古墳の断面模式図

みてみましょう。まず「竪穴系」の埋葬施設ですが、図7は藤枝市の高田観音前一号墳の埋葬施設、図8は静岡市の三池平古墳の埋葬施設です。高田観音前一号墳の埋葬施設は木棺直葬と呼ばれるタイプで、中央部に見える窪みが木棺の痕跡になりますが、墓坑（墓穴）に木棺を納めた後は、土をかぶせてしまいます。なお、木棺は長い年月を経る間に腐朽してしまい、調査で見つかったのはその痕跡のみです。

いっぽう、三池平古墳の埋葬施設は石を積み上げて作る竪穴式石室と呼ばれるものです。これも、中央部の石棺に死者を安置した後、石棺の上方を石で覆い、さらに土で被覆してしまいます。なお、三池平古墳は前期の古墳、高田観音前一号墳は中期の古墳です。



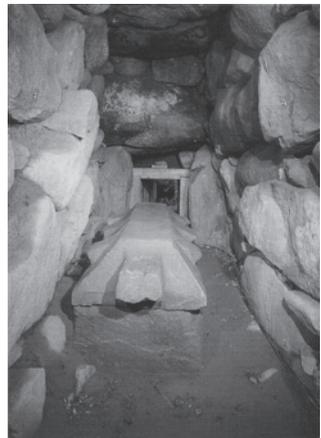
藤枝市高田観音前一号墳(木棺直葬)

図7 竪穴系の埋葬施設一



静岡市三池平古墳(竪穴式石室)

図8 竪穴系の埋葬施設二



静岡市賤機山古墳(横穴式石室)

図9 横穴系の埋葬施設一



伊豆の国市大北横穴群

図10 横穴系の埋葬施設二

いっぽうの「横穴系」の埋葬施設の例ですが、図9は静岡市の賤機山古墳の埋葬施設です。この写真は埋葬施設の中から外を見た構図ですが、奥に見えるのが埋葬施設と外部をつなぐ通路です。賤機山古墳の埋葬施設は横穴式石室と呼ばれる石を積み上げて埋葬施設を形成したもので、「横穴系」を代表する埋葬施設の一つです。

「横穴系」の埋葬施設としては、このほかに、横穴と横穴式木室と呼ばれるものがあります。横穴式石室は石を積み上げて作る埋葬施設ですが、横穴式木室は石ではなく木や粘土を使用しており、横穴は急傾斜地などの斜面に穴を穿ち埋葬施設とするものです。

共に分布は、全国的に見ても偏在性が認められます。静岡県を見ると、横穴式木室は遠江には存在しますが、駿河には存在しません。いっぽうの横穴は、駿河の一部や伊豆の一部にも存在します。図10は、伊豆の国市の大北横穴群の写真です。斜面に見える黒い部分が横穴の入り口です。

†横穴と横穴式石室の分布

駿河・伊豆で見られる「横穴系」の埋葬施設は、横穴式石室と横穴ですが、その分布状況には特徴があります(図11)。お示ししたとおり、横穴式石室は駿河・伊豆のほぼ全

域に広がって
いますが、横
穴は静岡市の
一部と伊豆半
島のつけ根付
近に偏在的に
分布します。

このことか
ら、古墳時代後
期の東駿河は
主流となる「横
穴系」の埋葬
施設から、大
きく二つの地
域に区分でき

ることになります。一つは、横穴式石室が急増する富士山南麓〜愛鷹山南麓の地域、もう一つは横穴が盛行する江の浦周辺の地域です。

分布状況に一定の傾向を持つ横穴式石室と横穴ですが、それぞれを詳細にみると、さらなる特徴を看取することができます。

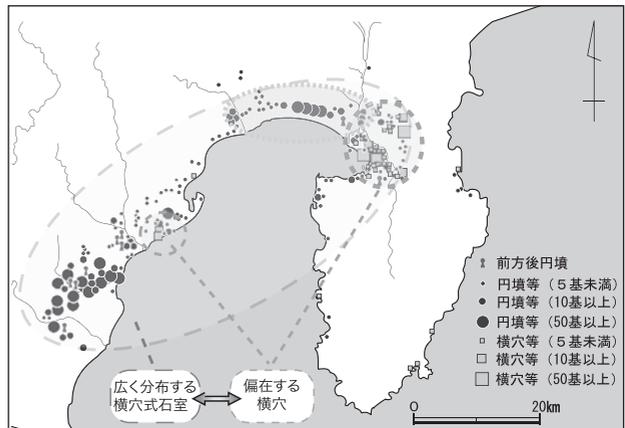


図11 横穴式石室と横穴の分布

↑横穴式石室の各部名称と実測図

まず、横穴式石室から、その特徴を見ることにしますが、横穴式石室は石室の各部に様々な名称が付いています。横穴式石室の特徴に注目するには、その各部名称の理解が必要になります。また、説明の際には実測図を多用します。そこで、本題に入る前に、話を進めるにあたって必要となる各部の名称と実測図の見方について説明をすることになります。

まず、各部の名称ですが、図12は横穴式石室の模式図です。横穴式石室は死者を埋葬する場所である「玄室」と外への通路である「羨道」に大きく分かれます。「玄室」の入り口は「玄門」、「羨道」の入り口は「羨門」と呼ばれます。「羨門」は石室の入り口でもあるため、「開口部」という呼ばれ方もします。

玄室は三方を壁に囲まれた空間になっていますが、最奥部の壁は「奥壁」、両側の壁は「側壁」と呼ばれます。横穴式石室の中には「玄室」と「羨道」の幅に違いがあるものが存在します。基本的には「羨道」より「玄室」の幅が広いのですが、平面的に見た場合「玄室」の入り口である「玄門」において屈曲が生じます。この屈曲部を「袖」または「袖部」と言います。「袖」の状況は、横穴式石室を考える上で

大きなポイントとなる部位です。

そして、死者を埋葬した後は、「羨道」に石を積み上げる、あるいは板状の石を使用するなどして、「玄室」

を塞いでしまいます。この塞いでしまう部分を「閉塞部」と呼び、閉塞に使用される石材を「閉塞石」と呼びます。

次に、実測図の見方を説明します。図13は、静岡市の賤機山古墳の横穴式石室の図面ですが、①は横穴式石室の床面直上を真上から見た図で、「平面図」とも言います。上が奥壁側、下が開口部側となる図が一般的です。②は横穴式石室の内側から奥壁を見た図です。輪郭として記されているのは奥壁手前付近でみた石室の横断面の図です。③は横

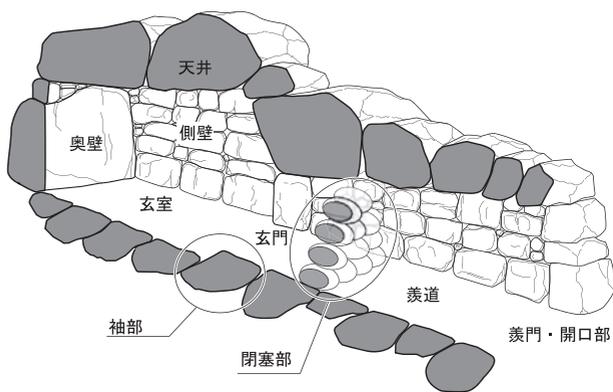


図12 横穴式石室の各部名称

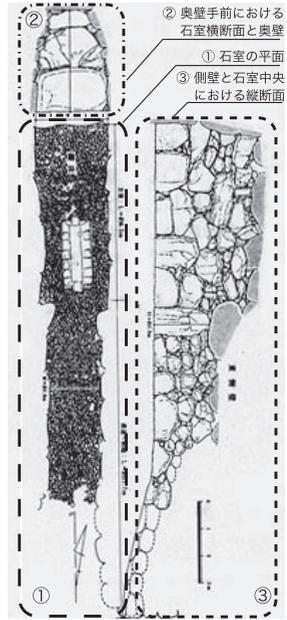


図13 実測図の見方

穴式石室の中から側壁を見た図です。輪郭として描かれるのは、石室中央部における石室の縦断面図です。なお、この図では、入り口側から奥壁を見た場合の右側の側壁のみが示されていますが、平面図を挟んで左右両側壁が対照に示される場合が一般的です。

† 「袖」を持つ石室と持たない石室

それでは、横穴式石室の特徴から東駿河の様子を探っていきましょう。横穴式石室は、先ほど説明したとおり、各部に名称がついていますが、その各部の差異から形態分類が行われます。その際、特に注目されるのは「石室の平面形」や「天井の構造」、「床面の構造」、「袖の構造」です。中でも「袖の構造の違い」は多くの研究者が着目する分類要素で、その形状から「両袖式」の石室、「片袖式」の石室、そして

袖を持たない「無袖」の石室に分類されます(図14)。

このうち、「両袖式」は、羨道幅に対し玄室の幅が広く、羨道から玄室を見ると、両方の側壁が屈曲し広がる形態です。「片袖式」も羨道幅に対し玄室の幅が広いのですが、羨道から玄室を見た場合、左右の側壁のどちらかのみが屈曲し広がる形態です。「無袖」は羨道幅と玄室幅の差がないため、側壁に屈曲する部位を持たないタイプです。このほか、東海地方には「擬似両袖式」と呼ばれるタイプが存在します。「擬似両袖式」は羨道と玄室の幅に差が無く、平面形を見すると「無袖」に見えますが、両側の側壁を見ると玄室と羨道の境に立柱石と呼ばれる縦長の石材を配し、玄室と羨道の区分としているタイプです。

この四種の石室は、いずれも静岡県の東半の地域に存在しますが、その分布状況には特徴があります。

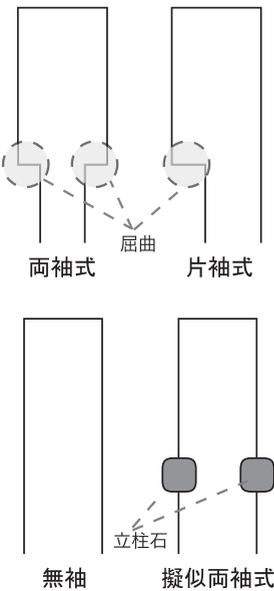


図14 石室の形態

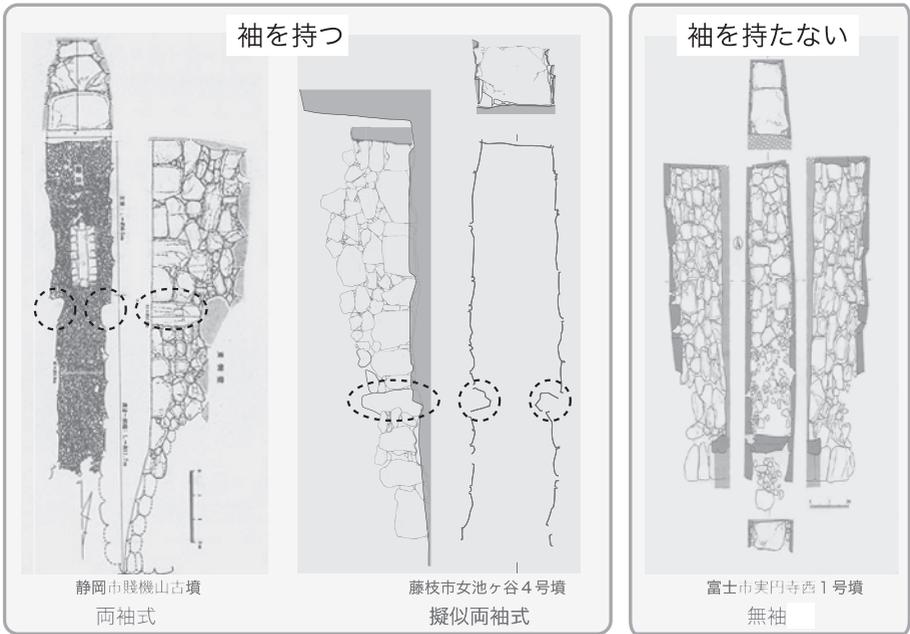


図15 袖を持つ石室と持たない石室

図15は左から賤機山古墳、藤枝市の女池ヶ谷四号墳、富士市の実円寺西一号墳の横穴式石室の実測図です。それぞれ、両袖式、擬似両袖式、無袖の代表的な石室といえます。

両袖式の賤機山古墳、擬似両袖式の女池ヶ谷四号墳は、破線円で囲った範囲が「袖」にあたります。賤機山古墳は平面図で見ると羨道と玄室の境に屈曲する部位があり、側壁にも立柱石が据えられ玄室と羨道を区分しています。女池ヶ谷四号墳は平面図を見る限り羨道幅と玄室幅に差はありませんが、側壁図には立柱石があり、立柱石が石室内にせり出すことで玄室と羨道を区分しています。いっぽう無袖の実円寺西一号墳には、平面図、側面図ともに袖に当たるものを看取することはできません。石室の形態別で見ると、駿河において数多く見られるのは、擬似両袖式と無袖です。

さて、先ほど、分類した四つの形態は「袖」の有無に着目すると、「袖」を持つものと持たないものに大別できます。そして、「袖」を持つものと持たないものの分布には特徴があります。

図に示した両袖式の賤機山古墳と擬似両袖式の女池ヶ谷四号墳はともに西駿河の古墳です。西駿河では両袖式や擬似両袖式に加え少数ながら片袖式も存在しており、西駿河

には「袖」を持つ古墳が分布することがいえます。いっぽう、無袖の実円寺西一号墳は東駿河の古墳です。実円寺西一号墳のような「袖」を持たない石室は、西駿河にも分布していることから、「袖」を持たない石室は駿河のほぼ全域に分布すると言えます。しかし、「袖」を持つ石室は、富士川流域から愛鷹山南麓には分布しません。いっぽうで、箱根西麓や伊豆西海岸には、極少数ですが袖を持つ石室が分布しています。

つまり、駿河——伊豆を含めますが——は、袖を持つ石室が分布する地域と分布しない地域に分けることができます(図16)。東駿河は無袖の石室が盛行する地域といえることができます。

↑床に段を持つ石室と持たない石室

「袖」の有無による地域色の他にも、地域的な特徴を示すものがあります。それは床面の構造です。

横穴式石室を縦に切って見た場合、床面が開口部から奥壁に至るまで、床面が平らなものと、床面に段差があり、玄室床面が開口部より一段低くなるものがあります。先ほど説明した「袖」を持つ石室は、全て床面が平らになりますが、無袖の石室には両者が見られます。

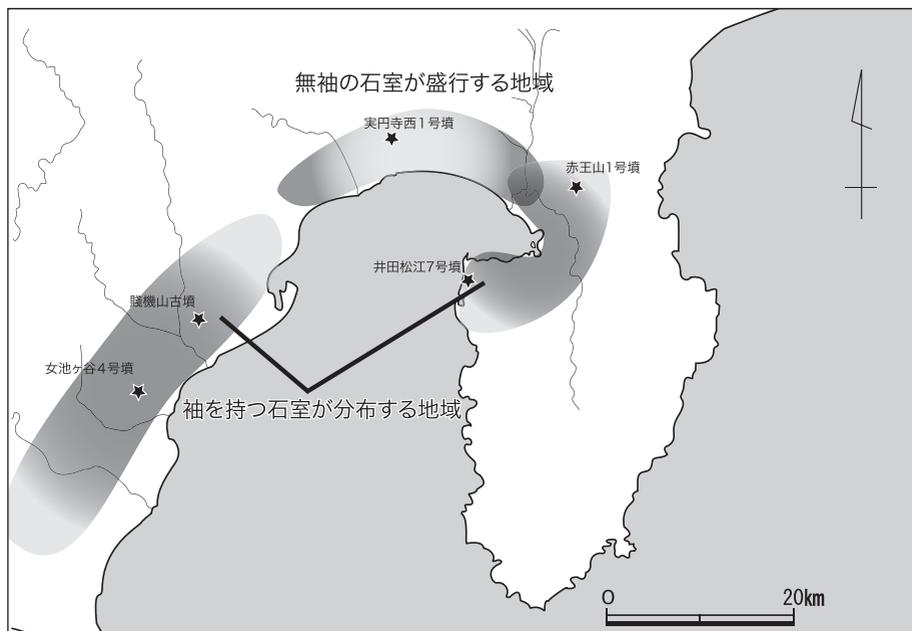


図16 袖を持つ石室の分布

図17に実測図を示した四基の石室のうち、

実円寺西一号墳、富士市の中原四号墳、藤枝市の釣瓶落七号墳は、無袖の石室です。まず、実円寺西一号墳の石室の図面において破線で丸く囲った部分に注目して下さい。側壁の図には石室の縦断面が記されており、玄室床面に対し開口部の床面が一段高くなっている様子が表現されています。そしてその段差の部分には石室を横断するような石材が床に配置されていることが平面図から読み取れます。中原四号墳は、側壁の図からは読み取ることが難しいのですが、平面図では開口部側に石材が並べられている様子が表現されており、玄室床面が開口部より一段低くなっていることがうかがえます。

いっぽうで、同じ無袖の石室ですが、釣瓶落七号墳は、側壁の図に示された石室の縦断面には、玄室から羨道、開口部にむけて床面が緩やかに下っている様子は表現されています。床面に段差の存在を見て取ることはできません。石室の平面図にも床面における造作は表現されていません。

なお、両袖式の賤機山古墳も実測図には床面の造作の表

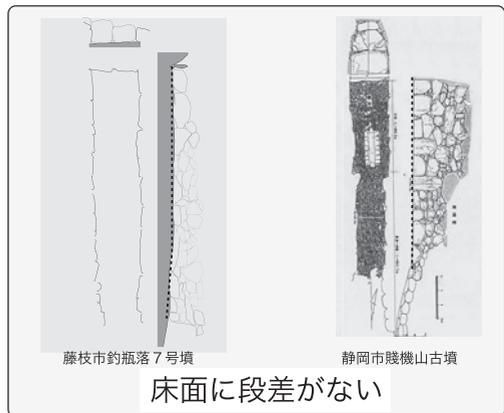
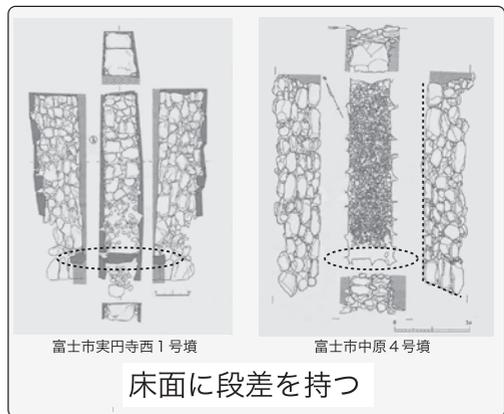


図17 床面の違い

現はなく、玄室から開口部に至るまで、床面がほぼ水平になっています。駿河における「袖」を持つ石室は、床面に段差を持つことはなく、賤機山古墳の様に玄室から開口部まで水平か、ごく緩やかに開口部にむけて下る程度です。

さて、この床面における段差の有無ですが、分布に偏りがあることが特徴といえます(図18)。実円寺西一号墳、中原四号墳に代表される「段」を持つ床面の石室は、富士川流域以東、境川以西に分布がほぼ限られます。いっぽう、床面に「段」を持たない石室は駿河・伊豆の全域に分布し

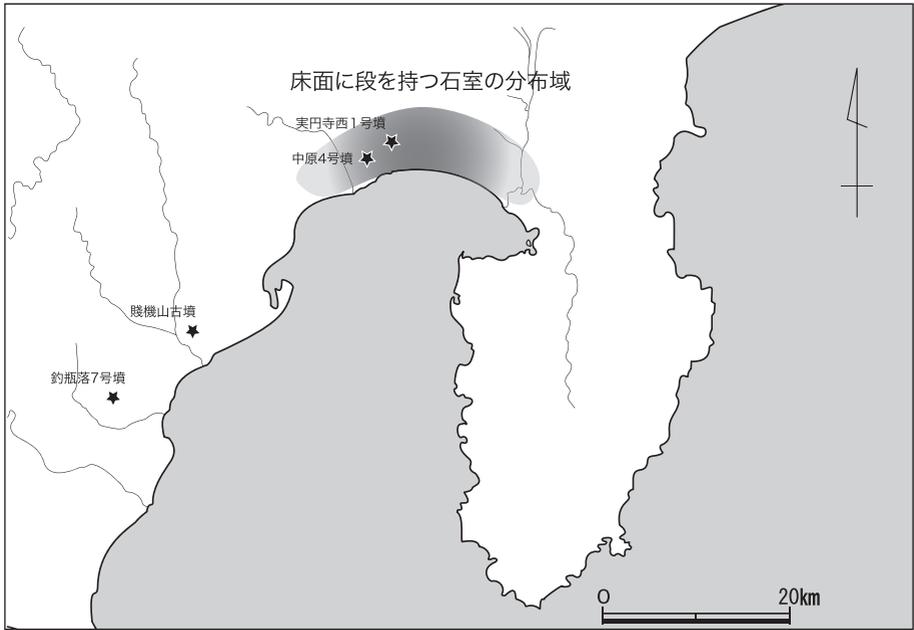


図18 床面に段を持つ石室の分布

ます。つまり、駿河・伊豆における横穴式石室の床面の構造には地域差があるといえ、床面に段を持つ石室の存在は東駿河における石室の特徴といえます。

†石室築造方法の違い

次に、もう一つ東駿河における横穴式石室の地域性をうかがえる特徴をあげたいと思います。それは、石室の裏込めです。いままでの説明にはない言葉なので、簡単に説明しておきますが、「裏込」とは、横穴式石室の奥壁の石材や側壁の石材と墳丘の盛土との隙間に詰め込まれる土砂や石です。古墳とその埋葬施設である横穴式石室を造る過程で、横穴式石室の側壁の石材や奥壁の石材を並べ積んでいきませんが、その際、側壁の石材や奥壁の石材の石室内部からみた反対側、墳丘の盛土との隙間には空隙が生じてしまうので、この部分には何かしらのものを入れる必要があります。言葉で説明しても、わかりにくいとおもいますので、実際の古墳の写真をみてみましょう。

まず、図19は富士市の船津寺ノ上一号墳の石室です。写真中央の縦長の長方形の部分が横穴式石室の玄室にあたる部分です。長方形部分を取り囲む白い物は石室の石材です。長方形部分の左右に整然と並ぶのが側壁にあたります。そ

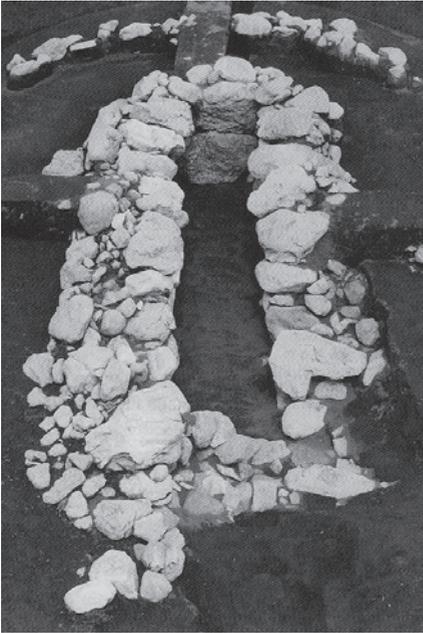


図20 虎杖原古墳の石室と裏込め



図19 船津寺ノ上一号墳の石室と裏込め



図21 小鹿堀ノ内山一号墳の石室と填丘

してそのさらに外側の黒い部分が墳丘の土にあたります。ここで注目してほしいのは、側壁と墳丘の間です。墳丘との間には側壁以外の石材が多数存在する様子がうかがえるかと思えます。これが裏込めに使用されている石材です。この古墳は石室の裏込めに石材が多用されている例といえます。

図20は、沼津市の虎杖原古墳ですがこの古墳も、石室の裏込めに石材が多用されている例です。

いっぽうで、図21の静岡市の小鹿堀ノ内山一号墳の古墳横断面の写真を見て下さい。古墳を輪切りにしている珍しい写真ですが、中央部に見えるのが横穴式石室です。石室の側壁の外側に注目して下さい。側壁の石材と古墳の墳丘の盛土の間には、側壁の石材以外の石材をみることができません。この古墳では、石室の裏込めに石材は使われていません。

このように石室の裏込めには、石材が多用されるものと、ほとんど石材が使用されないものが存在します。そして、この裏込めにおける石材の使用状況にも地域差があります。

船津寺ノ上一号墳は富士市の古墳、虎杖原古墳は沼津市の古墳です。ともに、東駿河の古墳です。いっぽう、小鹿堀ノ内山一号墳は静岡市の古墳です。実は、駿河・伊豆の

全域で見られるのは小鹿堀ノ内山一号墳のような、裏込めに石材をほとんど使用しないタイプです。石材を多用する船津寺ノ上一号墳や虎杖原古墳の様なタイプは駿河・伊豆——静岡県内といってもいいですが——では、東駿河に分布が限られます(図22)

十 東駿河の横穴式石室の特徴

以上、横穴式石室について「袖の有無」、「床面の構造」、「裏込めの状況」という三つの観点から、お話をしてきましたが、いずれの観点においても、特色を持つ地域をあげることができました。それが、今回のタイトルにある「東駿河」の地域です。それでは、東駿河の特徴を両隣の西駿河や伊豆と対比させてまとめてみましょう。まず、石室の平面形で見ると、東駿河は袖を持たない無袖の石室が石室形態の主体となる地域ですが、西駿河や伊豆には無袖の石室とともに袖を持つ石室が分布しています。次に床面の構造としては、東駿河は玄室床面が開口部より一段低くなる石室が分布しますが、その他の地域には分布しません。そして、古墳の構造としては、東駿河には裏込めに石材を多用する石室が存在しますが、西駿河や伊豆には見られません。無袖が盛行し床面に段を持つ石室や裏込めに礫を多用する



図22 石材多用裏込の石室の分布

石室が存在する地域が東駿河といえます。

十伊豆の横穴

さて、これまで横穴式石室の特徴から東駿河の特色を見てくださいましたが、横穴系の埋葬施設としては横穴も東駿河の東端部から伊豆にかけて存在します。そこで、次に横穴についても見てみましょう。

横穴は先ほどまで説明をしていた横穴式石室のように石材を積み上げて埋葬空間を作るのではなく、山肌の垂直に近い様な斜面を水平方向に掘削して埋葬空間を作り出しています。静岡県では北伊豆二帯の他、東遠江に多く分布し、限定的ですが静岡市にも存在します。なお、沼津市の江の浦や香貫山・徳倉山周辺にも横穴は存在します。この一帯は東駿河の一部といえますが、ここではこの地域の横穴も便宜的に「伊豆の横穴」として以下の話を進めます

横穴は急斜面を掘削し空間を作り出すため、地質的な制約も受けれます。軟弱な地層や硬質の岩盤では横穴を穿つことはできません。ある程度の強度と掘り安さを兼ね備えた地質が求められます。分布に偏りがあるのは、地質的な制約とも理解することができますが、横穴を造りえる地層が露頭しているにも関わらず、横穴式石室が造られている場

合もあるのです、一概に地理的要因が横穴の分布を左右しているとは言い切れません。なお、伊豆の横穴の多くは、箱根新規軽石流と呼ばれる地層と凝灰岩層に造られます。

具体例をみてみますと、三島市の南東部から函南町にかけては、箱根新規軽石流に横穴が造られます。函南町の柏谷横穴群はその代表例です(図23)。いっぽう、沼津市の江の浦一帯から伊豆の国市においては、凝灰岩を掘削して横穴が造られています。伊豆の国市の大北横穴群はその代表



図24 大北横穴群



図23 柏谷横穴群



図26 宗光寺三号横穴



図25 大北一号横穴



図28 大師一号横穴



図27 大北三二号横穴

例といえます(図24)。このような地層が露頭する斜面に、伊豆の横穴は造られます。なお、この二つの横穴群はともに国の指定史跡となっており、この地域を代表する横穴群です。

さて、次に伊豆の横穴の特徴を見てみましょう。まず、注目したいのは築造のピークです。伊豆では横穴式石室とほぼ同じか僅かに遅れて横穴の築造が開始されます。ともに七世紀代を通じて造営がされますが、横穴式石室は七世紀の前葉〜中葉が築造のピークといえます。いっぽう、横穴群の形成がピークを迎えるのは、七世紀中葉以降のことで、八世紀前半まで多数の横穴が造られます。横穴は横穴式石室にくらべ造営のピークが遅れることが特徴の一つと言えます。

次に注目したいのは形態です。伊豆において一般的といえる横穴の形状としては、開口部が角張ったアーチ状の形態で、床面には造作がなく、内部に石櫃とよばれる火葬骨の埋納容器や石棺がないタイプです(図25)。しかし、中には開口部が二段構造になり床面に段差を持つもの(図26)や、開口部が方形のもの(図27)、内部に石棺や(図28)石櫃を持つ横

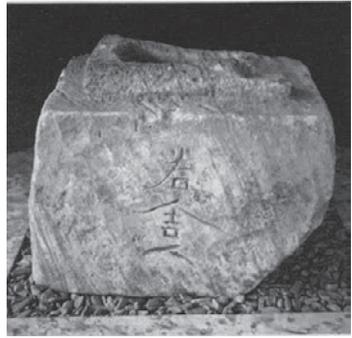


図29 「若舎人」銘石櫃

穴もあります。なお、大北三四号横穴で発見された石櫃は「若舎人」と陰刻されており、静岡県を代表する考古資料の一つとなっています(図29)。

このように様々な形態の横穴が同一群中に見られることは、伊豆の——特に伊豆の国市の——横穴群の特徴といえます。なお、ほかとは異なった特徴を持つ横穴は、概して比較的規模の大きな横穴や群の中心を占める横穴などで見られる傾向があります。これらの横穴の被葬者は、群中のほかの横穴の被葬者とは違った存在であることを意識していたのかもしれませんが。

†東駿河の埋葬施設

以上、古墳時代後期における駿河や伊豆の埋葬施設について概観しましたが、その中で東駿河は西駿河や伊豆とは違った特徴を持つ埋葬施設が存在することがわかっていただけでしょうか。

あらためてまとめると、まず、東駿河は横穴式石室が埋葬施設の主流となる点で、横穴が盛行する伊豆とは異なる傾向をもつと指摘できます。そして、横穴式石室が主流となる点は西駿河と共通しますが、東駿河には西駿河で見られる「袖」を持つ石室が存在しないという点で、西駿河にはない床面に段を持つ石室や石材多用の裏込めを持つ石室が存在するなど、石室の形態や構造が西駿河と東駿河では異なります。図30で説明すると、図のうち①とした範囲は横穴が主流となる地域、②と③は横穴式石室が主流となる地域になります。このうち、③の地域は袖を持つ石室が存在し、②の地域は無袖が主流であるとともに、石材を裏込めに使用する石室や玄室床面が一段低くなる石室が存在する地域です。

このように、東駿河は東西に隣接する地域とは埋葬施設の特徴が異なり、独自色を持った地域といえます。もつとも、両地域と接する縁辺部においては、隣接地の影響を受けた埋葬施設が存在しており、多分に漸移的な地域色といえます。

ところで、このような東駿河、西駿河、伊豆の各地における埋葬施設の地域色は、どのような経緯で生じたのでしょうか。その要因の一つとして考えられるのは、各地におけ

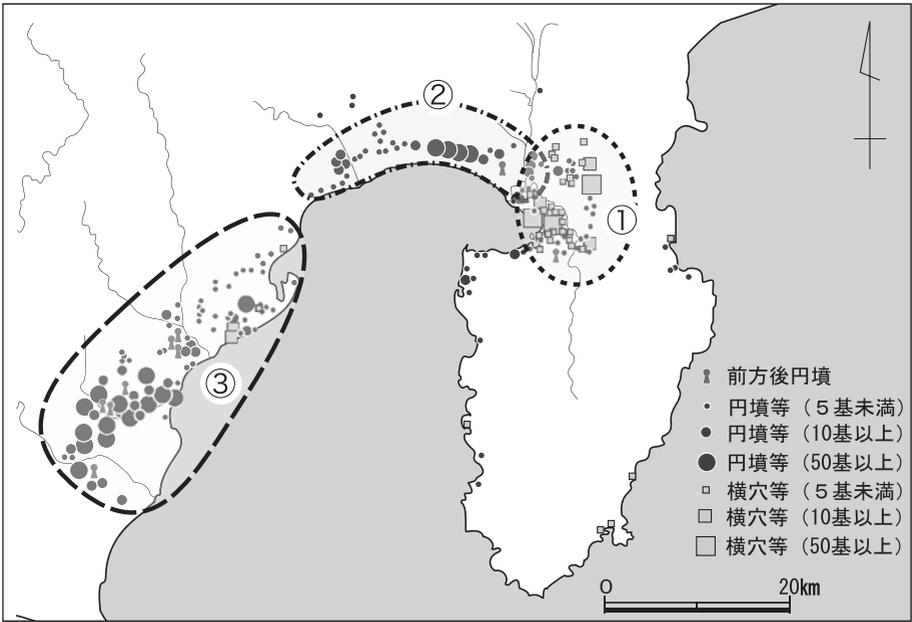


図30 埋葬施設に見られる地域色

る埋葬施設の導入経緯の違いです。横穴と横穴式石室では横穴系であることは共通しても、構築方法が全く異なることから、別系統の墓制であることは理解しやすいかと思えます。

いっぽう横穴式石室については、一見するとわかりにくいかと思います。しかし、先ほどまで見たように、横穴式石室には各部の構造や形態が異なるものが存在することは事実です。そして、この各部の違いは系譜の差によるものと考えられています。

駿河を含めた東海地方には幾つかの系譜が異なる横穴式石室が存在することが知られています。代表的なものとしては、「畿内系」の石室、「東海系（三河系）」の石室があり、少数ですが「北部九州系」の石室の存在も知られています。

このうち、西駿河で見られる「袖」を持つ石室は「畿内系」あるいは「東海系」の石室になります。そして、西駿河における無袖の石室の多くは、東海系の石室の退化形態と捉えることができます。なお、「畿内系」の石室とは畿内中心部における王墓などの石室と形態的特徴が類似するもので、駿河では賤機山古墳の石室が該当し、畿内との関係によりこの地域にもたらされた形態といえます。「東海系」の石室は三河に起源を持つ石室で、三河や遠江などとの交流によ

り、駿河にもたらされた形態です。

つまり、西駿河においては、畿内や三河・遠江との交流により横穴式石室が導入されたといえます。いっぽうの東駿河においては、畿内や三河・遠江、そして西駿河ではなく、別の地域との交流のもと横穴式石室を導入したといえます。ただし、現在の研究の成果ではまだ、東駿河における石室の原型がどこにあるのかは、定見をえていません。なお、

東駿河は当時の大和王権や近接地から等閑視されていた地域のように捉える方もいるかもしれませんが、東駿河には西駿河の石室と比較しても遜色ない規模を持つ石室が存在

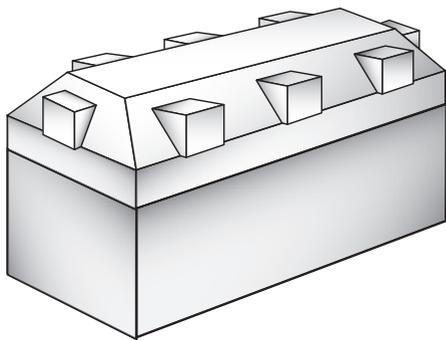


図31 家形石棺

したり、限られた被葬者のみが保有する装飾付大刀や馬具などを持つ石室が少なからず存在します。東駿河の人々の勢力が劣つていたり、他地域と全くの交流がなかったというわけではありません。また、埋葬施設の系譜が異なるからといっ

て、古墳時代後期において、東駿河と西駿河、伊豆のそれぞれが全く交流をもっていなかったわけではありません。そこで次に、別の考古資料から地域の交流を考えてみたいと思います。

海を越えて

†家形石棺と伊豆の凝灰岩

さて、静岡県の地図をみると、静岡県は伊豆半島と御前崎により駿河湾を抱いているようにみることができま。特に西駿河と伊豆は、駿河湾により隔てられた地域のように感じられるかもしれません。しかし、古墳時代後期においては、海が地域を隔てていたとはいえないようです。今回は会場が海に近いこともあるので、海に関わる地域交流を考えてみたいと思います。そこで注目したい二つの考古資料があります。

まず、一つ目が「家形石棺」と呼ばれる「棺」です。古墳に死者を葬る際にはさまざま「棺」が使用されますが、「棺」は素材や形状により分類することが可能です。その一つに「家形石棺」があります。「家形石棺」というのは、石で造られた家のような形をした「棺」です(図31)。

冒頭で静岡県における古墳時代後期の代表的古墳として紹介した静岡市の賤機山古墳は、埋葬施設である石室の中に「家形石棺」を持ちます(図32)。この家形石棺は大きな石材から削り出し家の形に整え、死者を納める場所を削り抜いて造っている棺なので、刳抜式の石棺とも呼ばれます。

そして、賤機山古墳の石棺の石材は、伊豆の凝灰岩といわれています。このような伊豆の凝灰岩を使用した家形石棺・刳抜式の石棺は、賤機山古墳以外でも見つかっていません。その分布域は図33で示したとおり、静岡市と東駿河の



図32 賤機山古墳の石棺

東端部から伊豆にかけてです。東駿河東端部や伊豆の凝灰岩製の石棺の中には、時期や形態的特徴が賤機山古墳の石棺と異なるものもありませんが、長泉町原分古墳のように賤機山古墳の石棺との関連をうかがえる資料もあります。

先ほど、横穴の説明

の時には少しふれましたが、沼津市の江の浦周辺から伊豆の国市一带にかけては、凝灰岩が露頭しております(図34)。賤機山古墳等の静岡市の石棺は、こういった場所です。石棺を採取し、静岡まで運ばれたことになりませんが、何

トンもある石材を陸路で運んだとは考えがたく、海を越えて運ばれていったものと考えられます。東駿河や伊豆における凝灰岩製の石棺の中には、賤機山古墳の石棺の石材を採取・運搬の過程で関与した人物に関わるものがあると考えたいです。



図33 賤機山古墳の石棺



図34 露頭する凝灰岩(沼津市口野)

なお、駿河においては、家形石棺の他に「組合式箱形石棺」と呼ばれる複数の板状の石材を直方体状に組み上げて棺としているものもあります。組合式箱形石棺は静岡市周辺から愛鷹山南麓、箱根西麓、伊豆半島の古墳で多くみつかります。

つまり、西駿河と東駿河、伊豆の横穴式石室においては、石室の中に死者を納めるにあたって、組合式箱形石棺という棺を用いる場合があるという共通性を持ち、さらに、西駿河、なかでも静岡市周辺は東駿河東端部や伊豆とは凝灰岩製の石棺の使用という点で結びつきを持っているといえます。

† 駿東型の甕

次に注目したいのは、「駿東型の甕」とよばれる土器です。古墳時代後期には、「土師器」とよばれる素焼きの土器と、「須恵器」とよばれる窯で焼いた土器の二種類が存在しますが、ここで取り上げる「駿東型の甕」は土師器の甕になります。なお、「駿東型の甕」は「駿東甕」と略称される場合もあります。

さて、「駿東型の甕」は、どのような甕かというと、丸い胴部を持ち、その表面は、刷毛で調整するため細かな線が

見られ、口縁部

——土器の縁の部分ですが——

が厚みを持ち、平底の底面には、木葉痕——

葉っぱの葉脈の痕——がある土

器です（図35）。

なお、この時期、周辺の地域で見られる土師器の甕は胴が細長く、口縁部が厚くならないものが一般的です。

また、「駿東型の甕」は「駿東」と名が付きますが、西駿河や遠江の東部で



図35 駿東型の甕

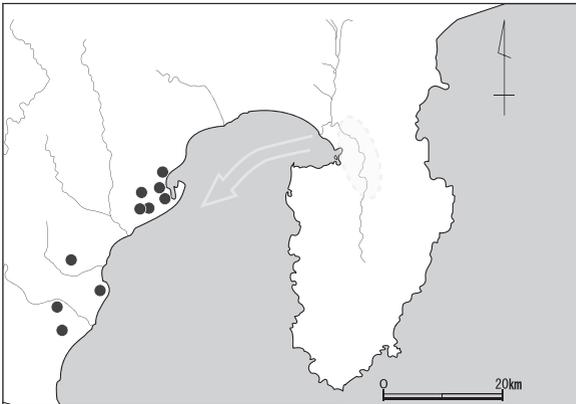


図36 西駿河の駿東型の甕

も出土が報告されています。特に西駿河においては一定の出土量があるため(図36)、「駿東型」ではなく、「駿河型の甕」と呼ぶのがふさわしいと指摘する研究者もいます。

ここで注目したいのは、この西駿河で出土した駿東型の甕です。土器は、その素材となる土に含まれている鉱物等を分析することで、何処の土を使って造られた土器か調べることが出来ます。藤枝市や焼津市で出土した駿東型の甕の土を調べたところ、伊豆半島——狩野川流域——の土が使用されるという結果が出たものがあります。土器の素材となる土そのものが運ばれて、西駿河で土器が焼かれたと考えることもできますが、おそらく伊豆で造られた土器が運ばれたものでしょう。そして、土器の様な大きくかさばるものが多数運ばれたことを考えると、その運搬は陸路よりも海路であったと考えられます。もともと、「土器」そのものが運ばれたのではなく、土器の中に何かを入れて運んだのかも知れません。

なお、このほかにも海を媒体とした交流をうかがえる資料が見つかりことがあります。その中で注目できるのは、伊豆の海岸に点在する古墳群です。沼津市の井田松江古墳郡の古墳から出土した鉄鍬——鉄製のヤジリ——の中には、駿河や遠江では一般的に見られるものと異なる形態のもの

もあり、同じく伊豆の西海岸にある沼津市の平沢古墳群から出土した、弓矢の矢を射れるコロクと呼ばれる容器に使用される飾り金具は遠く九州福岡の沖ノ島の遺跡から出土した資料と似ているなど、伊豆の海岸部の古墳の被葬者は海を舞台とした広域にわたる交流範囲をもっていたことがうかがえます。また、「洞穴墓」という自然にできた洞窟や岩陰を埋葬に利用したものもあります。「洞穴墓」が見られる地域は限られており、太平洋岸では、紀伊半島や三浦半島、房総半島に見られる程度です。これも立地や分布から海を介した交流が想定されるものです。

まとめ

以上、説明したように古墳時代後期における駿河・伊豆では、西駿河、東駿河、伊豆のそれぞれで古墳の主たる部位である埋葬施設の特徴が異なり、独自性を持っています。そのいっぽうで、埋葬施設に死者を埋葬するにあたって、石棺を使用する場合があるという共通性を持ち、石棺の中には、海を越えて運ばれたと考えられるものもあるなど、海を媒介とした交流があったことをうかがえる事例もあります。

ところで、西駿河では賤機山古墳の様に畿内からの流れを汲む石室が存在し、伊豆ではいち早い火葬の導入や「若舍人」銘の石櫃が存在するなど、畿内との関連性がうかがえる考古資料が存在します。東駿河の埋葬施設からは一見すると畿内とのつながりは薄いように見えますが、飾り大刀の存在などから畿内とのつながりが全くなかったとはいえません。なお、西駿河に畿内系の石室が導入されるのは六世紀後半、東駿河で飾大刀が多く見られるのは七世紀代、そして伊豆で横穴の造営が盛んとなるのは七世紀後半で八世紀になると火葬が行われます。畿内との関連を窺わせる資料が時代を追って東に移っていくことは、駿河・伊豆に対する畿内からの働きかけが西から漸移的に東に移っていったことを物語るものなかもしれません。そのいっぽうで、東駿河の埋葬施設には畿内からの影響がみられないことから、東駿河は西駿河や伊豆とは異なった扱われ方をされていた地域であったとも考えられます。

おわりに

以上、古墳時代後期における東駿河について、古墳の埋葬施設から見てきましたが、最後に、この地域の古墳のも

う一つの特徴を紹介させて頂きます。

実は今回取り上げた古墳や横穴の多くは、現存し実見することができません。

使用した写真の中にも、最近、現地に行つて撮影したものが多くあります。

伊豆を代表す

る柏谷横穴群や大北横穴群は国指定史跡として整備されていますが、このほかにも横穴では宗光寺横穴群、横穴式石室を持つ平石四号墳、井田松江古墳群は前方後円墳の駒形一号墳は現存します。特に伊豆西海岸屈指のビューポイントである「煙火の丘」の真下にある井田松江古墳群は、古墳の被葬者と海とのつながり、駿河湾を舞台とした古墳時代の人々の活躍を想像できる場所といえます(図37)。



図37 井田松江古墳と駿河湾

既にこれらの古墳をごらんになったことがある方も、もう一度、視点を変えてこれらの横穴や古墳を見ることで、新たな発見があるかもしれません。私自身も一回見た古墳や横穴でも、二回・三回と訪れるたびに、一回目に見た時には見落としていた新たな発見をすることがよくあります。これらの古墳を残し伝えていくとともに、地域に残る活きた歴史財産として活用していくことは私たち文化財に関わる者の課題といえます。今回の私の発表を聞いて頂くなかで、地元に残る古墳や横穴を見に行ってみようと思う方が一人でもいれば幸いです。

図の出典

- 図3 『石川古墳群』沼津市教育委員会・中日本高速道路株式会社 二〇〇八
- 図7 『高田観音前一・二号墳発掘調査報告書』藤枝市教育委員会 二〇〇三
- 図8 『三池平古墳』庵原村教育委員会 一九六一
- 図9 『史跡賤機山古墳保存整備完成記念 甍る賤機山古墳』静岡市教育委員会 一九九七
- 図19 『船津寺ノ上第一号墳発掘調査報告書』富士市教育委

員会 一九八七

図20 『寺林遺跡・虎杖原古墳』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 二〇〇三

図21 『駿河堀ノ内山古墳群』静岡市教育委員会 一九六七

図29 『東駿河・伊豆の古墳と横穴墓』三島市郷土資料館 二〇〇六

図35 『星久保古墳群』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 二〇〇二

なお、図6及び図12については、『横穴式石室誕生 黄泉国の成立』大阪府立近つ飛鳥博物館 二〇〇七を基に作成した。

[講師紹介]

滝沢 誠（静岡大学人文学部教授）

1962年東京都生まれ。筑波大学大学院歴史人類学研究科博士課程単位取得満期退学。筑波大学歴史人類学系助手、静岡大学人文学部講師、同助教授を経て現職。専門は日本考古学。近年の著作として「前方後円墳時代の駿河」（『静岡の歴史と文化の創造』、知泉書館、2008年）、『古墳時代中期における甲冑の同工品に関する基礎的研究』（静岡大学人文学部、2008年）がある。

篠原和大（静岡大学人文学部准教授）

1967年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。東京大学助手文学部（東京大学埋蔵文化財調査室）、静岡大学人文学部講師などを経て現職。専門は、日本考古学（弥生時代）。主な論文・著書に単著「静岡・清水平野における弥生遺跡の分布と展開」（静岡県考古学研究40、2008年）、編著『手越向山遺跡の研究』（六一書房、2011年）ほか。

菊池吉修（静岡県教育委員会文化財保護課主査）

1971年静岡県生まれ。静岡大学人文学部社会学科を卒業し、静岡県教育委員会に勤務。現在、藤枝市史編さん調査委員を兼ねる。専門は日本考古学。主な著書に『東日本の無袖横穴式石室』（共著：雄山閣、2010）ほか。

静岡大学公開講座ブックレット6

沼津の古代遺跡を考える

発行日——2012年3月21日

編集・発行——静岡大学生涯学習教育研究センター

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817

印刷——株式会社三創

